

金沢大学総合移転第II期計画地内埋蔵文化財調査報告  
・ 1995年9月

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/1567">http://hdl.handle.net/2297/1567</a>

# 金沢大学総合移転第Ⅱ期計画地内 埋蔵文化財調査報告・1995年9月

佐々木 達夫・向井 亙・庄田 知充

## I. 調査に至る経緯

金沢大学は総合移転実施中である。総合移転事業第Ⅰ期において、金沢大学は1984年から1987年にかけて埋蔵文化財発掘調査を行い、丘陵の頂部平坦部を短期間使用した縄文時代終末期の乾場山遺跡と、近世～近代の横穴を発見した[金沢大学遺跡調査委員会 1989]。総合移転事業第Ⅱ期計画中の1995年3月には田上カミ町(現在は角間カマ町)で試掘調査を行い、平安時代後期と推定される山間遺跡を発見した[佐々木他 1995]。同年9月には、理学部棟南方300mの山裾に残る4基の横穴を発掘調査した。本報告は横穴調査の研究報告である。

調査は金沢大学総合移転実施特別委員会の下に置かれた角間地区埋蔵文化財検討小委員会に「角間地区埋蔵文化財隧道調査団」を組織して実施した。調査団の構成は次の通りである。佐々木達夫、守屋以智雄、中村慎一(金沢大学文学部)、藤則雄(金沢大学教育学部)、山縣肇(金沢大学事務局企画調査課)、湯尻修平(石川県立埋蔵文化財センター企画調整課)。なお、このような調査体制には問題があるという論議が以前から行われており、今回限りの臨時的な措置であることを前提として調査団が組織された。

実際の発掘調査に参加したのは、団長の佐々木達夫の他は考古学専攻の学生である。向井亙、庄田知充、大濱菜緒(金沢大学大学院文学研究科考古学)、関高志、井貫昇平、小沢佳憲、酒井中、高木晃、吉田和則、井沢麗、犬塚あや子、九千房百合、吉井剛、荒木麻里子、泉亜依子、笛吹正徳、大河原健司、大木岳志、勝俣竜哉、菅野美香子、中西貴人、中野百合子、森由佳、山下篤志(金沢大学文学部考古学コース)。所属は調査実施時。

角間地区埋蔵文化財隧道調査団を組織した角間地区埋蔵文化財検討小委員会は1996年7月5日に廃止され、新たに調査組織設立を前提にして金沢大学総合移転実施特別委員会の下に金沢大学埋蔵文化財調査運営委員会が設置された。しかし、組織設置の遅れや学内事情の変化に伴い、同年11月22日、金沢大学将来計画検討委員会の下に金沢大学埋蔵文化財委員会の設置が決まり、委員会で調査組織の検討が始められた。本調査団は金沢大学埋蔵文化財委員会に本報告を提出して解散する予定である。

## II. 遺跡周辺の地理的環境

角間地域の地形(図1)は標高70～160mの比較的なだらかな段丘を伴う盆地状地形である。段丘はいずれも河岸段丘である。水系は角間川が唯一の河川で、河谷は丘陵、段丘地をぬって樹枝状に発達する。南部域には角間川の浸食による小平坦地がある。横穴が所在する場所は、その小平坦地の角間川南側に沿う舌状の尾根の先端部麓標高約96mに位置する[金沢大学遺跡調査委員会 1989]。角間地域の大部分の地質は黄褐色砂岩で、現在活発な浸食作用を受け、山崩れ・崖崩れ・地すべりなどの地殻変動が起こっている[里見他 1984,p.3]。

調査した横穴を東側から第1号、第2号、第3号、第4号、第5号横穴と名付けた。第1・2号横穴

は尾根先端部の東斜面で谷地の開口部に位置し、横穴開口部外には尾根の麓をめぐる農道が通る。第3号横穴は先端部北斜面に位置し、北側約50mには角間川が西流する。第4号横穴は先端部北西斜面の谷地入口付近に位置し、第1・2号横穴と同様に開口部外側に尾根の麓をめぐる農道が通る。第5号横穴は第2号横穴の北側出口部分で、第4号横穴西方約10mで第4号横穴より低い位置にある。

### III. 発掘調査の経過

現地調査は1995年4月に開始した。本格的な発掘調査は9月4日から9月20日にかけて行い、その後も補足調査等を継続し、考古学研究室で図面整理作業を1996年10月まで行った。本文中での「地表面」は横穴掘削当時の地表面、横穴内部の「底面」は横穴掘削当時の横穴内部の底面を指す。

#### 上角間横穴遺跡発掘調査日誌

1995年4月～8月 予備調査および準備期間

9月4日(月曜日)

発掘調査開始。第1号～第4号横穴周辺を草刈り。各横穴開口部～外側にトレンチを設定。標高95.726mのコンクリート製杭を基準に標高杭を設定。杭1は第1・2号横穴開口部の外側に設定。標高95.595m。杭2は第3号横穴開口部外側に設定。標高94.543m。第4号横穴については開口部外側に既存の「文部省」コンクリート製杭を利用。標高97.668m。第4号横穴において地表面確認。

9月5日(火曜日)

第2号横穴内部～外側に設定されたトレンチ(A区)で地表面確認のためトレンチ拡張。第3号横穴開口部～外側に設定されたトレンチ(B区)で人頭大の石積み検出。第4号横穴、地表面確認のためトレンチ拡張後、断面図作成終了。

9月6日(水曜日)

各横穴の位置を確定するための測量開始。第1号横穴開口部外側での地表面確認のためトレンチ(A区)を拡張。コンクリート製U字溝を検出。第3号横穴開口部外側のトレンチ(B区)での石積みの下部から木製部材を検出。B区での石積みの広がりを確認する目的で断面図作成のためのトレンチ壁を畦状に残して東側に拡張。第4号横穴でのトレンチ北東側の堆積土を除去し、地表面を確認。

9月7日(木曜日)

第1号横穴開口部～外側のトレンチ(A区)で検出されたコンクリート製U字溝下位に別の水路を確認。第2号横穴開口部付近で横穴の形状を確認するためにトレンチ(A区)拡張。第3号横穴開口部～外側のトレンチ(B区)の断面図作成終了。

9月8日(金曜日)

第3号横穴開口部～外側のトレンチ(B区)断面図写真撮影終了。

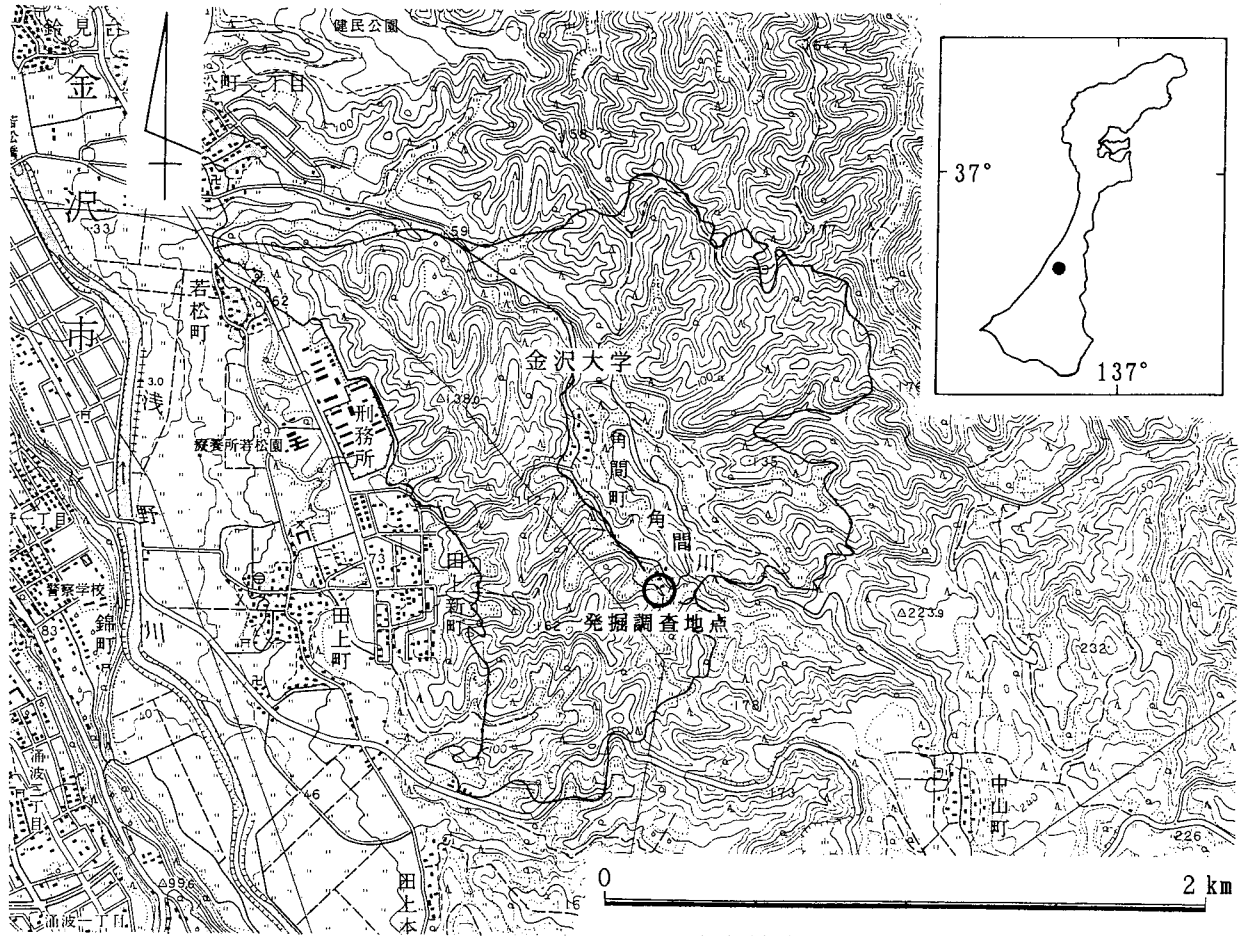
9月11日(月曜日)

午前中、降雨。出土遺物の登録番号の方法を決定。午後より天候回復。発掘調査開始。第1号横穴開口部外側で検出された石積みの西方向への連続を確認するために西側へトレンチ拡張。石積みは西方向へ連続しないことを確認。

9月12日(火曜日)

第2号横穴開口部から内部に17.3mの位置のトレンチ(F区)を設定。第3号横穴開口部付近のトレンチ(B区)を拡張。また開口部から内部に6mの位置にトレンチ(H区)を設定。これらのトレンチの拡張や新たな設定は、横穴内部での堆積土を除去して第2・3号横穴の形状を確認するため。

9月13日(水曜日)



国土地理院 2万5千分1地形図「金沢市」(1975年)を使用

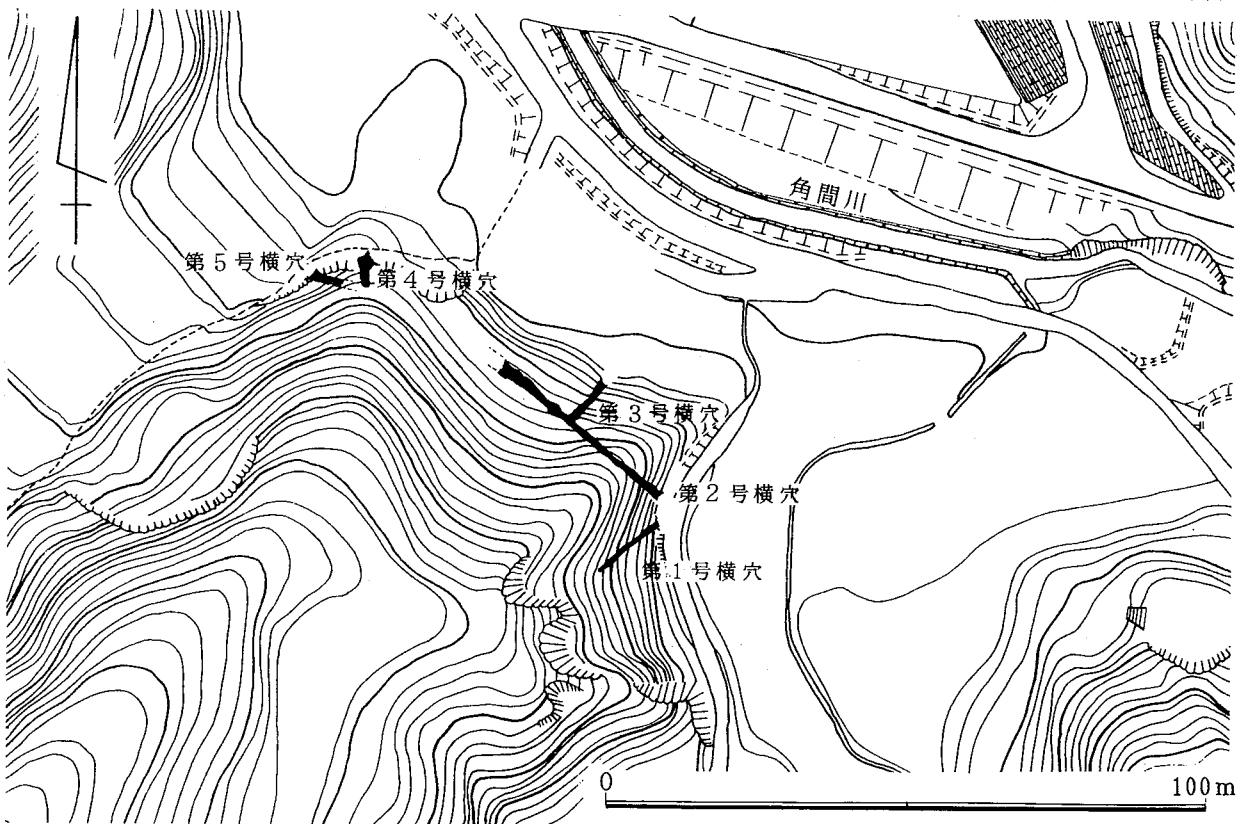


図1 発掘地点と周辺の地形

第2号横穴開口部から内部に17.3mの位置のトレンチ(F区)での横穴輪切り状断面図作成終了。第3号横穴開口部外側の石積み図面作成終了。

9月14日(木曜日)

第1号横穴開口部付近で横穴の形状を確認するためにトレンチ(A区)を拡張後、輪切り状断面図作成終了。第3号横穴開口部付近(B区)の輪切り状断面図作成終了。第2・3号横穴結合部に新たにトレンチ(G区)を設定。結合部より多量の石・瓦・木製部材を検出する。第2号横穴及び第3号横穴内部の断面図作成終了。

9月15日(金曜日)

第2・3号横穴内部で確認した21基の灯明台の実測作成終了。第2号横穴開口部から内部に5.8m・10.8mで、それぞれ新たにトレンチ(D区・E区)を設定。第1号横穴開口部外側のコンクリート製U字溝付近写真撮影。第1号横穴開口部～外側の断面図作成終了。第2・3号横穴結合部のトレンチ(G区)の石・瓦・木製部材の出土状況平面図作成終了。

9月18日(火曜日)

第2号横穴開口部～外側の断面図作成終了。第1・2号横穴開口部外側の水路の平面図作成終了。第2・3号横穴結合部のトレンチ(G区)での石・瓦・木製部材の出土状況を写真撮影後、除去。第3号横穴内部の平面図作成終了。第3号横穴開口部外側のトレンチ(B区)内の平面図作成終了。

9月19日(水曜日)

第2・3号横穴結合部のトレンチ(G区)で底面確認後、第2号横穴側と第3号横穴側の輪切り状断面図作成終了。

9月20日(木曜日)

第2号・第3号横穴の2本の中心軸線の交差角度を計測(内角87度)。

9月26日(火曜日)

第2号横穴壁面の掘削痕の実測図作成終了。

1995年10月～1996年10月 補足的発掘調査、聞き取り調査、古文書調査、出土品の洗浄・注記・登録・接合・実測・トレース・レイアウト・撮影および研究、遺構撮影・実測図整理・レイアウト・トレースおよび研究。

#### IV. 調査の目的・方法・成果

調査目的は横穴の形態や内部の堆積土、および外部の施設を発掘調査で明らかにし、横穴が掘削された当時から使われなくなるまでの地形の変遷を復原することである。調査方法は、第1・2号横穴外側をA区、第3号横穴外側をB区、第2号横穴の開口部より5.8m内部をD区、10.8m内部をE区、17.3m内部をF区、第2号横穴と第3号横穴の結合部をG区、第3号横穴開口部より6m内部をH区、第4号横穴内部をC区と設定した。D～H区はトレンチ調査であり、A～C区は区域全体を発掘した。

##### 1. 第1号横穴

第1号横穴は開口部から南西方向に掘削されている。全長約11.8m。横穴の底面標高は開口部で96.90m。横穴内部の底面は平坦である。開口部外側では水路である溝状遺構を発見した。水路には時期の異なる3回の掘り込みがあり、古い時期より水路1、水路2、水路3とした。開口部外側での水路1底面の標高は96.35m。開口部底面との標高差は55cm。水路1は横穴底面に掘り込まれる。横穴内部での堆積土の厚さは30cm前後で、4層(第18・7・2・1層)に分けられる。第18層の上に堆積する第7層は、壁

土の崩落による堆積である。第7層の上には第1層が堆積する。第2層は第1層と第7層の間に部分的に堆積する。横穴外側の堆積層は、赤褐色の岩盤上に第21・20層が自然堆積する。その上の第19層は盛土による造成層と考えられる。この造成層は後述する聞き取り調査結果から約50年前につくられた農道と対応すると推定できる。また、聞き取り調査結果から第1号横穴は農道造成時には既に存在していたことがわかっているので、第1号横穴開口部外側での地表面は第20層上面であると考えられる。第19層、及び水路1内の堆積層である第16層、そして水路2内の堆積層の第11層が削平される。この削平は横穴外側を通る現在使用中の農道の拡張によるものと考えられる。第19層の上には第3・1層が自然堆積する。

開口部から横穴奥方向に長さ約170cm、幅約20cmのトレンチ、開口部から内部に55cmの位置で、輪切り状断面を確認するために幅約10cmのトレンチを設定した。第1号横穴の断面形は縦長台形で、輪切り状断面部での幅は上方が40cm、下方が55cm、底面から天井部までの高さは164cmである。

## 2. 第2号横穴

第2号横穴は開口部から北西方向に全長約36.80mが残存し、それより奥については落盤により土砂に埋没している。開口部から内部に約18.6mの北東壁で、第3号横穴とほぼ直角に結合する。第2号横穴南西壁には、第3号横穴の延長となる掘削の形跡はない。

### a. 横穴開口部付近および横穴外側の地表面

第2号横穴開口部外側の90cm付近での横穴底面の高まりは水路1の壁であり、高まりより奥の横穴地表面は水路1の底面である。開口部外側の第23層は造成層で、第1号横穴内部～外側のa1—a2断面図での第19層と同じ層である。造成層との判断の理由は堆積層の項で記述する。後述する聞き取り調査から、造成層は約50年前につくられた農道に対応すると推定できる。第1・2号横穴は農道造成以前からあったと聞き取り調査で判明しており、第2号横穴開口部外側での地表面は第23層下面であろう。

### b. 堆積層について

第2号横穴内部～外側のc1—c2断面図において、堆積層の厚さは横穴内部で約60cm、開口部外側で約70cm～1mである。第2号横穴外側での地表面は第23層下面である。第23層は先述のように第1号横穴内部～外側のa1—a2断面図第19層と同じ堆積層であり造成層である。これらの堆積層が造成層であることは、堆積層の土質が均質であり、第2号横穴開口部付近での崩落土である薄い堆積土と比較すると厚さが最大約70cmと厚いことから判断できる。聞き取り調査から、造成層は約50年前につくられた農道に対応すると推定できる。開口部外側約2.5mでの第23層上面の段差は、農道の創設よりも新しい時期の削平によるのであろう。第1号横穴外側で確認された削平と同様に農道幅の拡張による削平の可能性はある。第2号横穴内部の堆積層は、崩落土および横穴内部に流れ込んだのであろうが、土層断面では区別できなかった。水路はA区南方向から第1号横穴外側を横切り、第2号横穴開口部付近で北西に方向を変化させて第2号横穴内部に流れ込む。水路は第1号横穴外側でのa1—a2及びb1—b2の断面図と同様、3回の掘り込みが確認でき、古い時期より水路1、水路2、水路3とした。水路1は横穴底面に直接掘り込まれ、第21・20・19層が水路1の中に堆積する。水路2では横穴開口部外側に移動して掘り込まれている。水路2は造成層である第23層と、第17層を両側の壁として掘り込まれる。水路2の内部堆積土は第16～11層である。第11層より陶器瓦破片1点(KY95T2-97)が出土した。水路3は第13・11層から掘り込まれる。水路3の内部には、第10～7層が堆積する。第9層よりガラス製品1点(KY95T2-98)が出土した。水路2・3は約50年前の造成層(第23層)よりも新しい。

### c. 第2号横穴の構築時の形状

第2号横穴底面は、開口部地点で標高96.40m。開口部から内部に5.8m(D区)、10.8m(E区)、17.3m(F区)で標高96.40m、96.35m、96.03m、第3号横穴との結合部(G区)で標高96.26m。開口部と結合部

での底面の標高差は14cmで、開口部から奥に向かって傾斜して下る。A区(第2号横穴開口部付近)・F区では横穴底面東壁際に沿って細い溝状の掘り込みが発見された。この掘り込みは、F区では幅約27cmで深さ約16cmだが、D・E区では確認できず、横穴内の一部に水路を構築したとは断定できない。第2号横穴の構築時の形状は、横穴内の堆積土を除去して明らかになった。開口部付近は幅約60cm～120cm、高さ約162cm、穴の断面上方が円弧を描き、下方は逆台形である。F区は幅約50cm～65cm、高さ約200cm、開口部付近の横穴の形状より細長い断面台形で一人が通過できる程度の幅である。第3号横穴との結合部より奥は、天井部や壁部の崩落のため最大幅約220cm、堆積土上面から天井までの最大の高さ約230cmと空間が広がるが、崩落の危険性が高く調査区は設定しなかった。開口部付近についても崩落によって形状が変化した可能性が高い。

d. 第2号横穴内部の灯明台

第2号横穴内には、灯明を設置するための壁面の掘り込みが東壁15基、西壁5基、合計20基発見された。各灯明台の計測数値は表1(14頁)に示している。各灯明台の寸法は、幅約12cm～18cm、奥行き約8cm～15cmで、形状は底面が水平で、横穴の掘削方向に向かって斜めに掘り込む共通点を持つ。灯明台には煤の付着はない。灯明皿は発見されなかった。開口部に最も近い灯明台は6.64m奥にあり、開口部から最も遠いのは第2号横穴開口部から20.12mの東壁にある20号灯明台で、第3号横穴との結合部より奥である。結合部より奥は、壁土の崩落で不明である。

e. 水路

第1号横穴と第2号横穴の開口部外側の平坦部に水路がある。水路は平坦部の南端から山際を北流し、第2号横穴前面で流路を北西方向に変化させて第2号横穴に流れる。図2は水路1の平面図であり、水路1の上端幅は約80cm、底面幅が約56cm、深さ約40cmの断面逆台形である。底面の標高はA区南壁で96.35m、a1-a2断面で96.35m、第2号横穴開口部付近で96.43mとほぼ水平である(表2)。第1号横穴外側でのa1-a2断面図、b1-b2断面図、第2号横穴内部～外側でのc1-c2断面図での堆積層観察から、水路1は横穴底面に掘り込まれ、その後、水路1内の覆土に水路2・3と2回の掘り込まれていることがわかる。

表2 水路1・2・3の底面とその標高

	a1-a2 断面図(図3)	c1-c2 断面図(図5)
水路1	第17層下面 96.38m	第21層下面 96.38m
水路2	第11層下面 96.64m	第16層下面 96.47m
水路3	第6層下面 96.78m	第10層下面 96.56m

3. 第3号横穴

第3号横穴は尾根の先端部の北東斜面に開口する。横穴の方位は北東-南西で、ほぼ直線に掘削される。全長約9m。開口部は急な傾斜面の途中にあり、第1・2号横穴と異なる。第2号横穴とT字状に結合する。底面標高はG区(結合部付近)の第3号横穴側で標高96.51m、H区(開口部から6m内部)で標高96.30m、開口部地点(B区)で96.24mと標高差27cmで、第2号横穴との結合部から第3号横穴開口部に向かって傾斜して下る。

第3号横穴は最大幅約130cm、高さ205cm～220cm。底面の幅は、B区(第3号横穴開口部付近)で約20cm、H区で約15cmで狭く、第1・2号横穴と異なる。横穴内部には約20cmの土砂が堆積する。

a. 第3号横穴開口部から外側にかけての堆積と関連施設

第3号横穴開口部の約1m外側の急斜面下部には斜面を削平した上段と下段の2段の平坦面があり、

上段平坦面では、地表面上に盛土(第29～27層)して平坦面をつくり石積みで土留めしている。地表面から上の堆積層の厚さは横穴開口部付近で約35cm、平坦面上で約50cmである。

石積みは第3号横穴開口部北東に位置し、東西方向にほぼ直線に並ぶ。上段平坦面には、薄い堆積層が3層(第29～27層)ある。石積みと地表面との間には木材(幅約20cm、厚さ約5cm)が敷かれているが、その長さは2本とも調査区外に続き不明である。削平された地表面に敷かれた木材の上に径約30cm～70cmの石が3～4段に積まれる。積み方に規則性はなく、大きさもさまざま、積み上げるに際して石を整形していない。石積みの高さは木材も含めて約45cm～55cmである。石積みの上面はほぼ水平で、標高約94.60mである。石積みが途切れる西側には、第3号横穴開口部から用水が流れ落ちて形成されたであろう径約50cmの穴が2つある。

第3号横穴開口部付近の第23～16層は第3号横穴内部を水が流れたことによる堆積であろう。第15～1層、第26～24層は横穴上部及び周辺の急傾斜面からの崩落土の堆積であろう。

#### b. 第2・3号横穴結合部と灯明台

第2・3号横穴は第2号横穴開口部から奥に約18.1mの位置でT字状に結合する。結合部分では第3号横穴の底面は第2号横穴底面より29cm高い。第3号横穴底面の標高は約96.51m。第2号横穴底面の標高が96.22mである。第3号横穴底面は幅が約15cm～20cmとゆるいU字形であるが、第2号横穴底面との結合部付近では底面幅が約50cmに広がり平坦になる。結合部での第2号横穴底面では2本の溝が発見された。西側の溝はG区南西壁際で2本の溝が合流し西方向へ湾曲、G区西壁際に沿って続く。幅と標高は溝合流部で約60cmで標高96.15m、西壁際に沿う部分では5cm～20cmで標高96.29m。東側の溝は結合部より始まり、第2号横穴内を北方向に東壁に沿って続く。確認できた長さは79cm、溝底面の標高は横穴結合部で96.22m。

結合部での土層堆積は、図10の第2号横穴側の断面図と、第3号横穴側断面図に示すとおりである。堆積土の厚さは第2号横穴側で約75cm、第3号横穴側で約50cm。第2号横穴側に堆積する第9～7層は第3号横穴側では確認されない。第3号横穴側の底面に堆積するのは第6層であり、第2号横穴側では第7層の上に堆積する。第6層より上層では第2号横穴側・第3号横穴側で一部を除き同じ堆積土層である。堆積土中から瓦3点(内2点は図16:47～48)と木材3本、径約10cm～40cmの石が30個ほど出土した。

#### 4. 第4号横穴

第4号横穴は舌状の尾根先端部北西斜面に位置する。前面には尾根の麓をめぐる農道が通る。第4号横穴開口部は西方向を向くが、開口部から約2mで南方向に折れるため横穴の平面形はL字形である。横穴の東西方向の幅は約2.8m、南北方向の長さは約5.1m。堆積土を取り除いた底面は開口部から奥に小さな平坦面を4段作りながら階段状に下る。各平坦面の標高は、開口部付近で97.07m、2段目で96.98m、3段目で96.52m、4段目で96.39m、1段目と4段目の標高差は59cm。堆積土は全て開口部の上方からの崩落による。堆積土は粒子の粗い砂質土で開口部の上方の土質と同じである。第3層からはプラスチック製戸車の付いた引き戸の部材、部材直下からはビニール袋片が出土した。



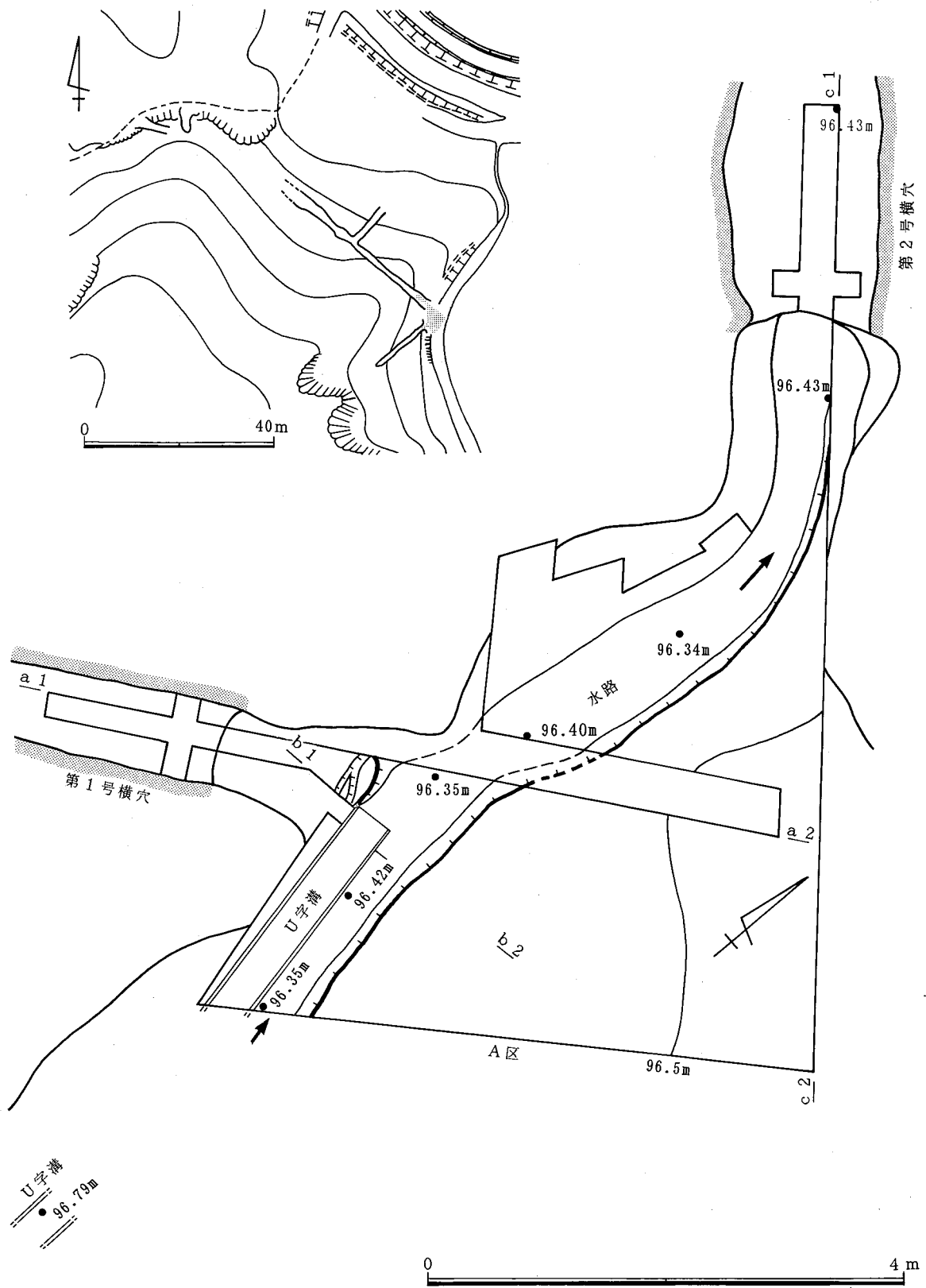


図2 第1・2号横穴開口部付近平面図



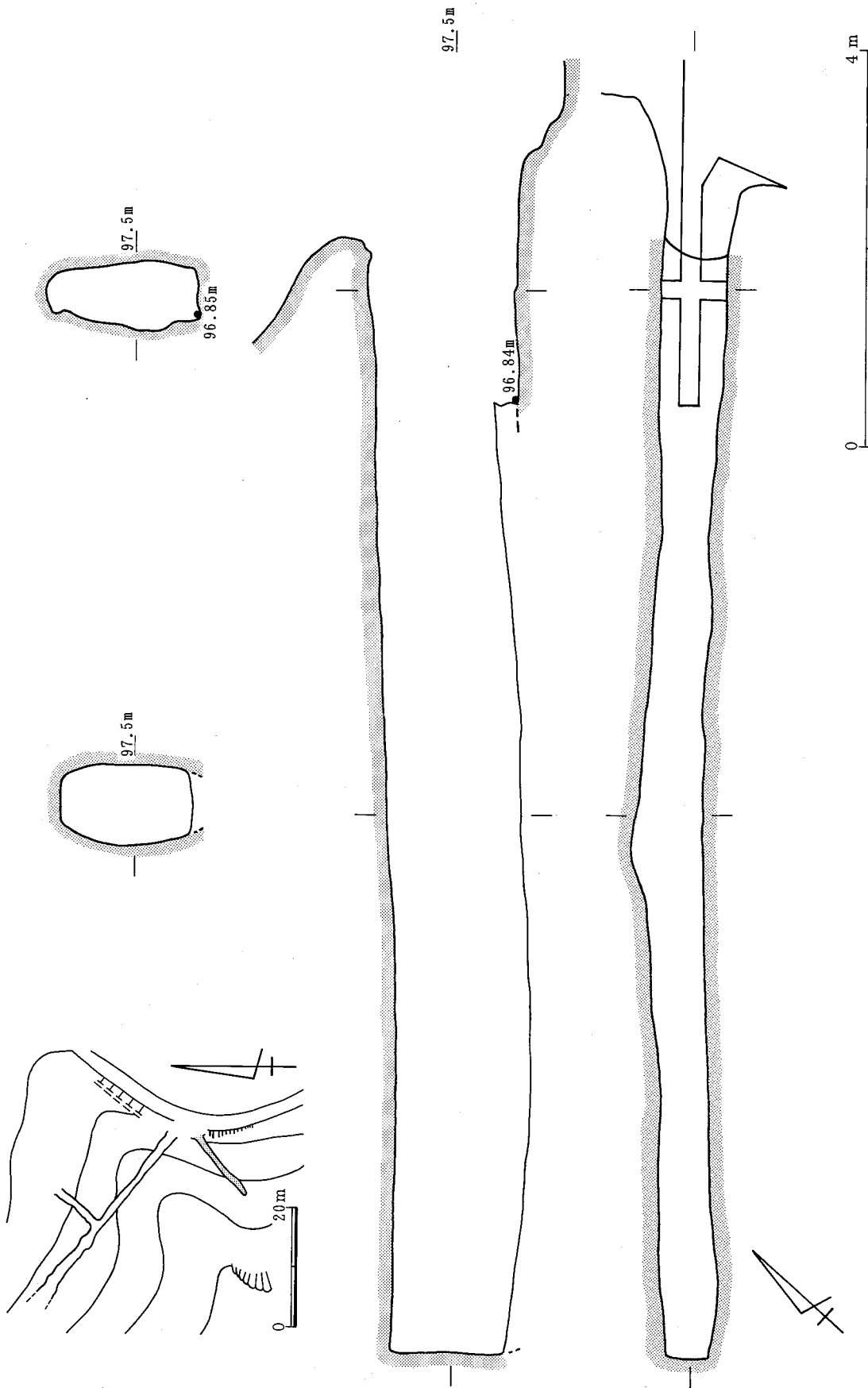
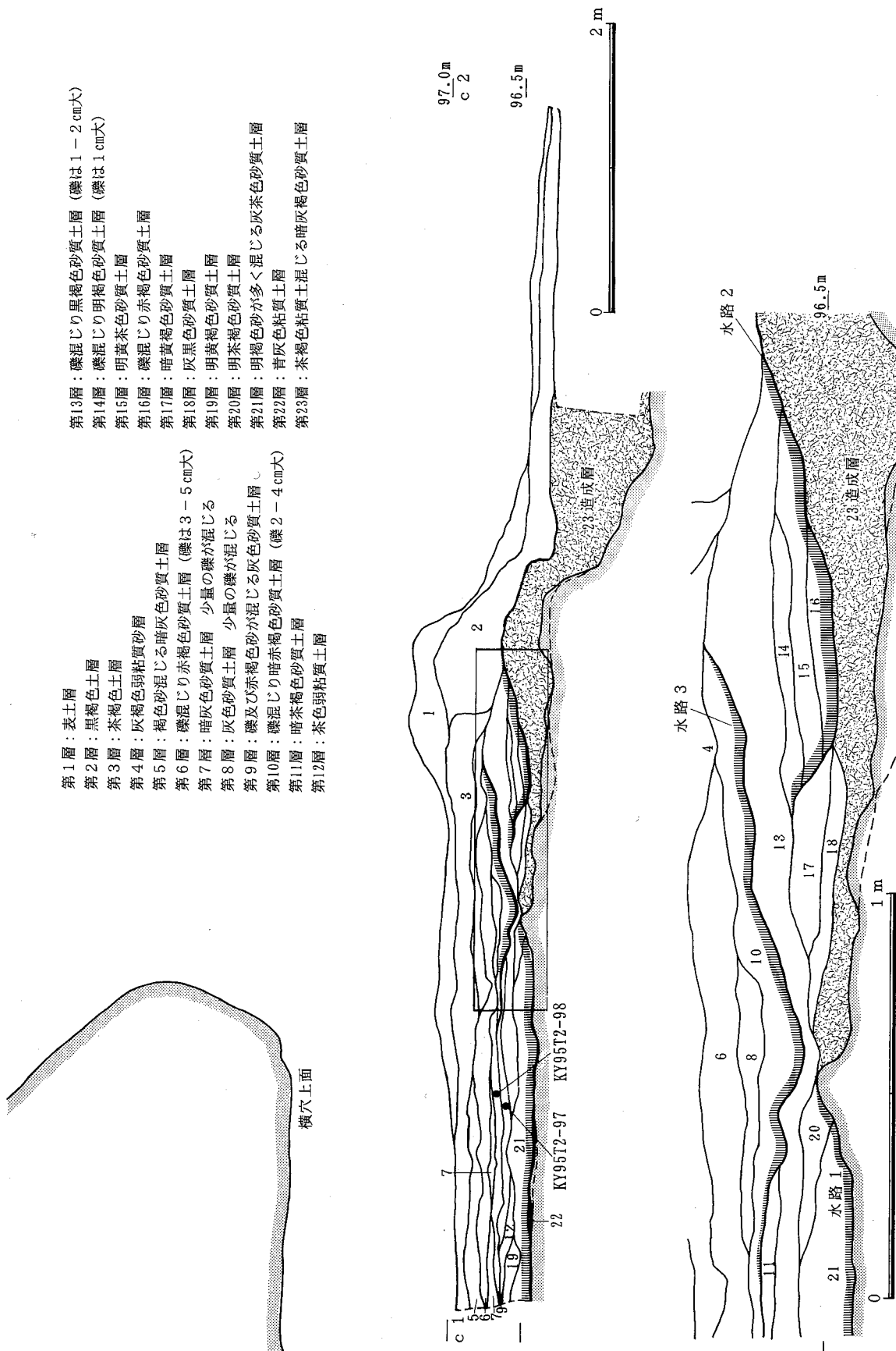


图4 第1号横穴平面图·断面图



- 第1層：表土層
- 第2層：黒褐色土層
- 第3層：茶褐色土層
- 第4層：灰褐色弱粘質砂層
- 第5層：褐色砂混じる暗灰色砂質土層
- 第6層：礫混じり赤褐色砂質土層 (礫は3-5cm大)
- 第7層：暗灰色砂質土層 少量の礫が混じる
- 第8層：灰色砂質土層 少量の礫が混じる
- 第9層：礫及び赤褐色砂が混じる灰色砂質土層
- 第10層：礫混じり暗赤褐色砂質土層 (礫2-4cm大)
- 第11層：暗茶褐色粘質土層
- 第12層：茶色弱粘質土層
- 第13層：礫混じり黒褐色砂質土層 (礫は1-2cm大)
- 第14層：礫混じり明褐色砂質土層 (礫は1cm大)
- 第15層：明黄茶色砂質土層
- 第16層：礫混じり赤褐色砂質土層
- 第17層：暗黄褐色砂質土層
- 第18層：灰黒色砂質土層
- 第19層：明黄褐色砂質土層
- 第20層：明茶褐色砂質土層
- 第21層：明褐色砂が多く混じる灰茶色砂質土層
- 第22層：青灰色粘質土層
- 第23層：茶褐色粘質土混じる暗灰褐色砂質土層

図5 第2号横穴開口部外側断面図

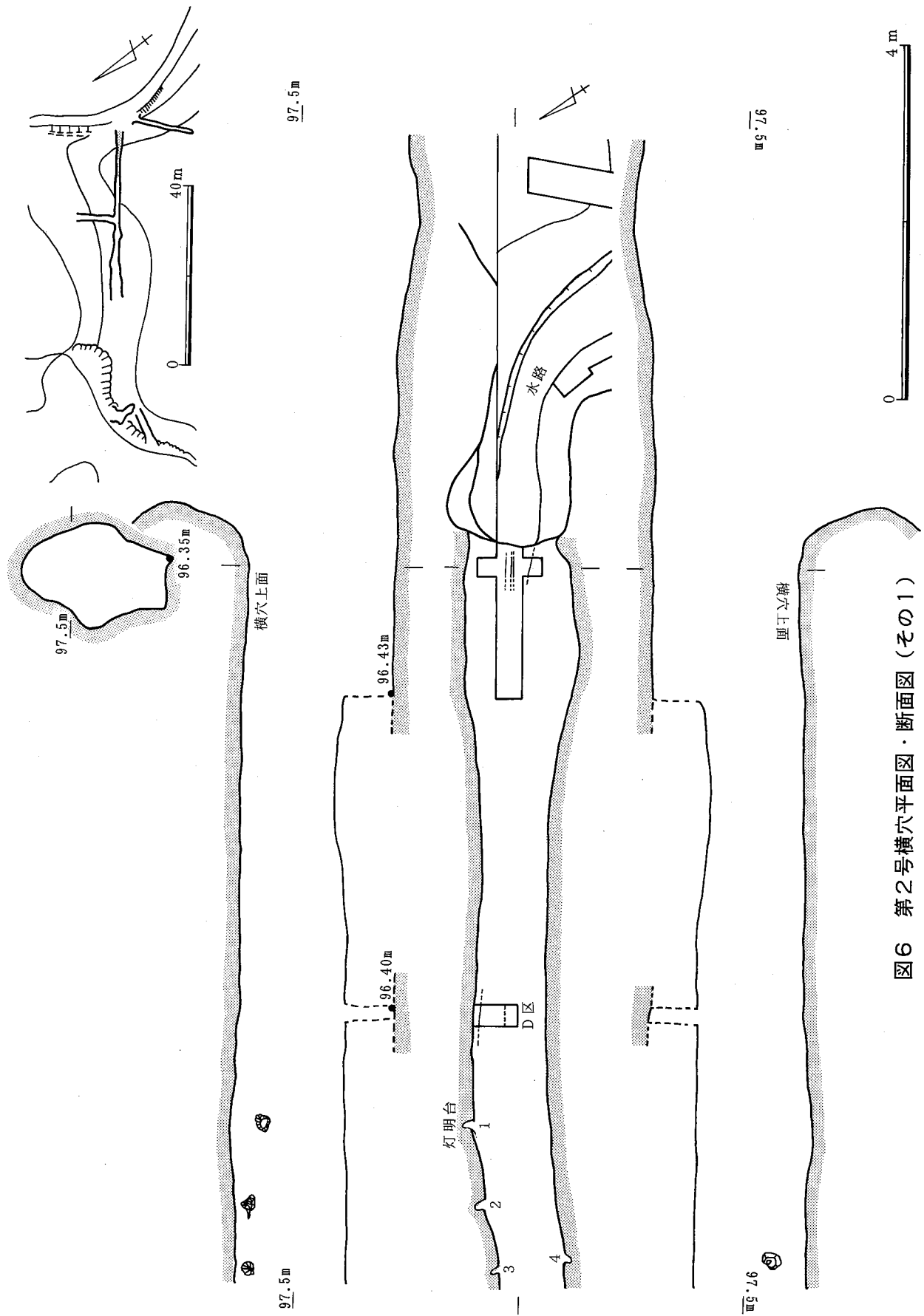


図6 第2号横穴平面図・断面図(その1)

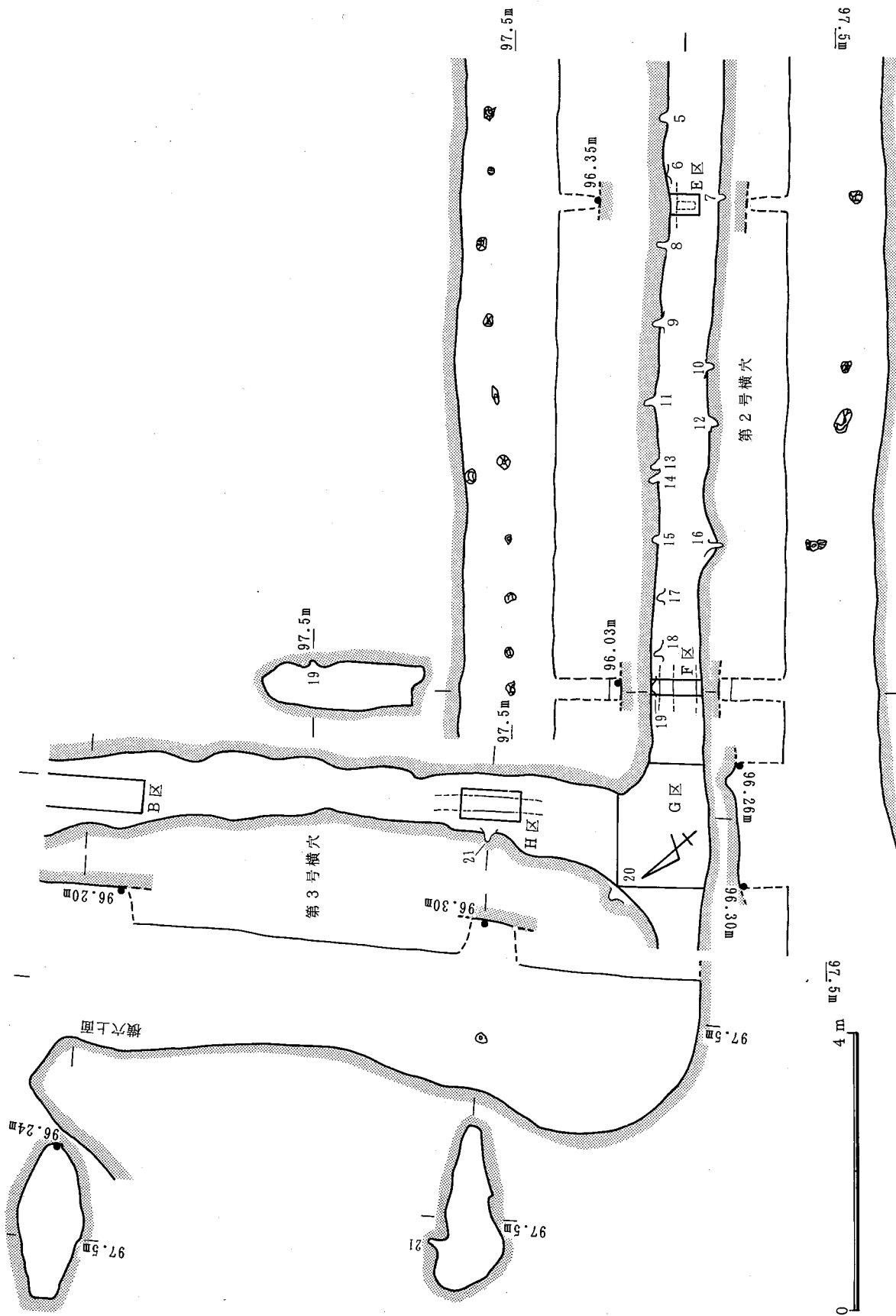


図7 第2号横穴平面図・断面図(その2) および 第3号横穴平面図・断面図

灯明台番号	開口部からの距離(cm)	壁	底面からの高さ(cm)	正面幅(cm)	奥行き(cm)	灯明台番号	開口部からの距離(cm)	壁	底面からの高さ(cm)	正面幅(cm)	奥行き(cm)
1	6.96	東		17	15	12	13.62	西		31	18
2	7.96	東		19	14	13	14.32	東		18	16
3	8.32	東		15	13	14	14.50	東		18	18
4	8.48	西		15	9	15	15.32	東		13	8
5	9.58	東	145(E区)	12	11	16	15.38	西		13	24
6	10.67	東	141(E区)	12	4	17	16.08	東		13	11
7	10.70	西	143(E区)	16	11	18	16.80	東	144(F区)	13	10
8	11.28	東	156(E区)	17	13	19	17.30	東	141(F区)	15	9
9	12.48	東		17	15	20	20.12	東	177(G区)	15	17
10	13.00	西		16	8	21*	6.00	北	153(H区)	17	17
11	13.48	東		25	16						

※ 21は第3号横穴内部に位置する。

表1 灯明台の計測数値

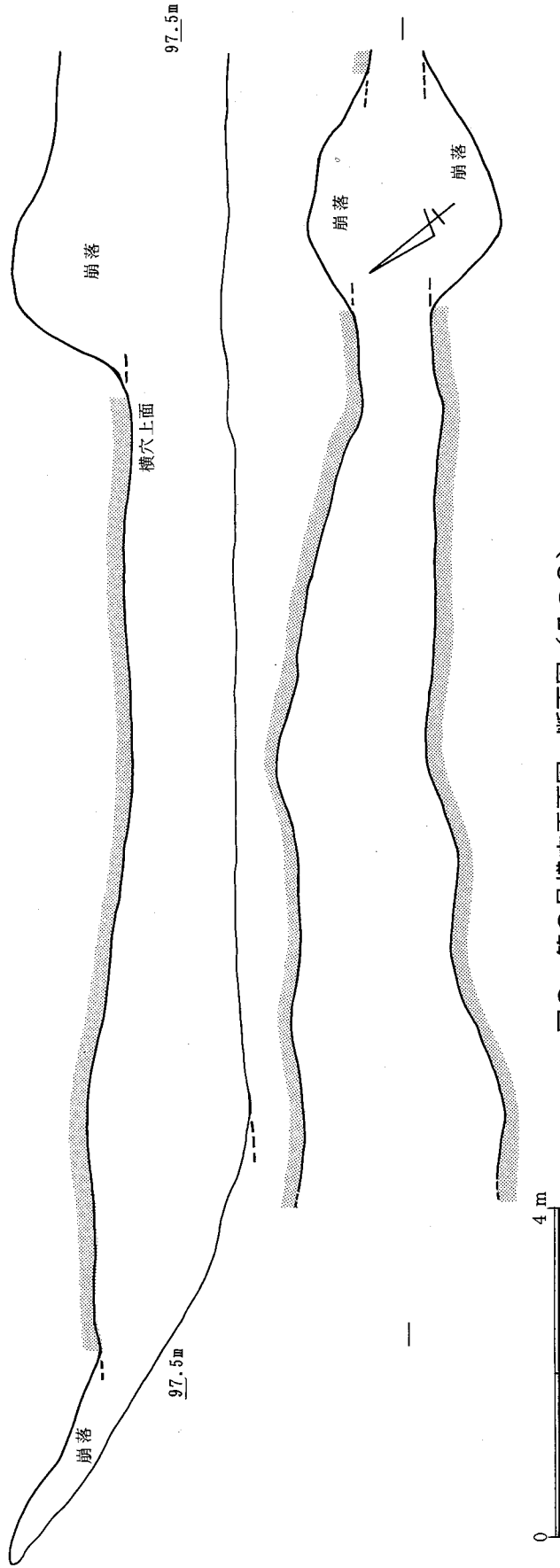
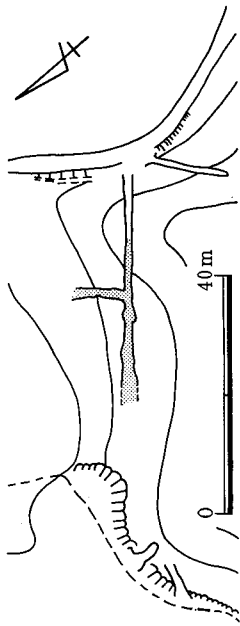


図8 第2号横穴平面図・断面図(その3)

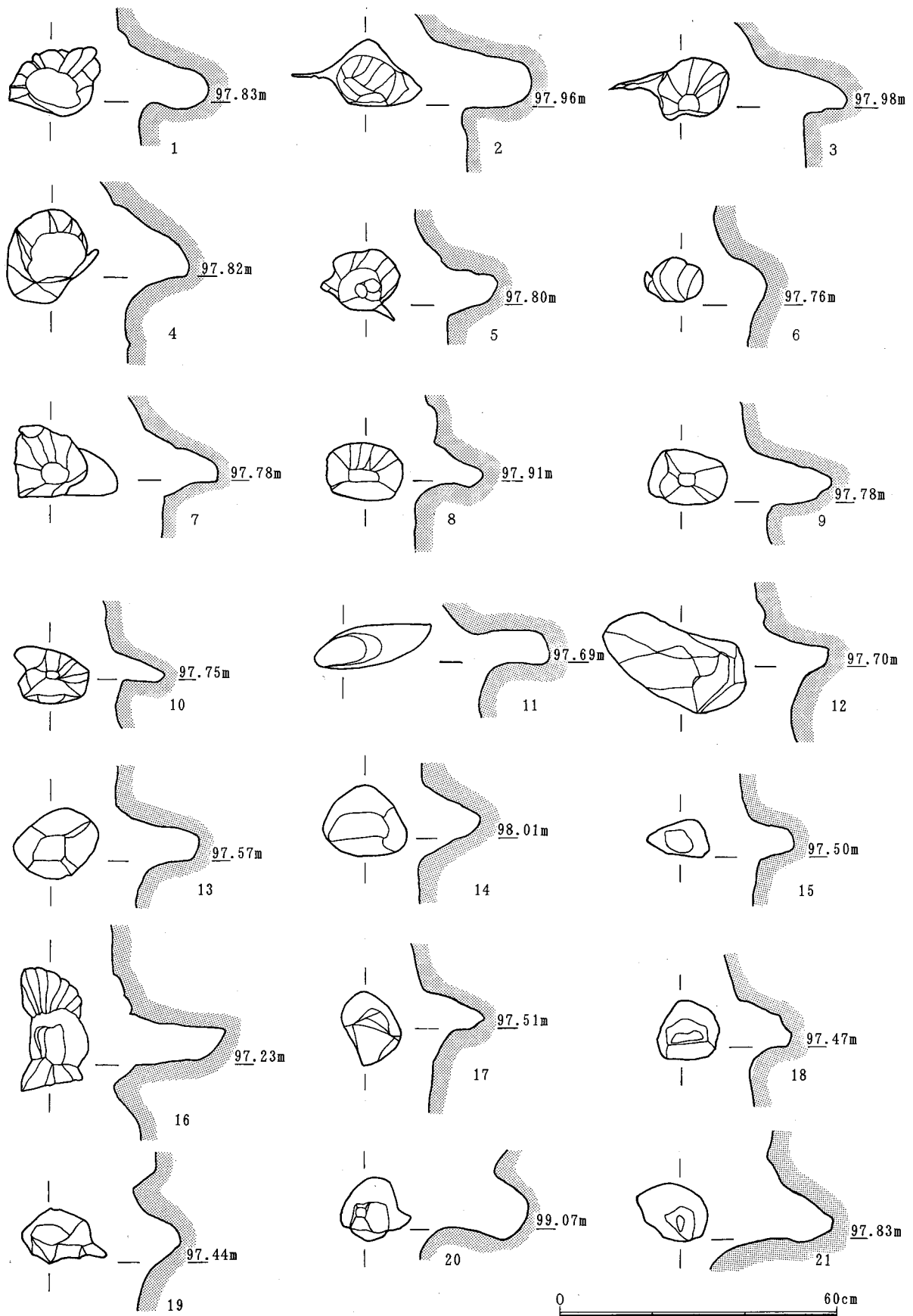


図9 第2号・第3号横穴灯明台平面図・断面図



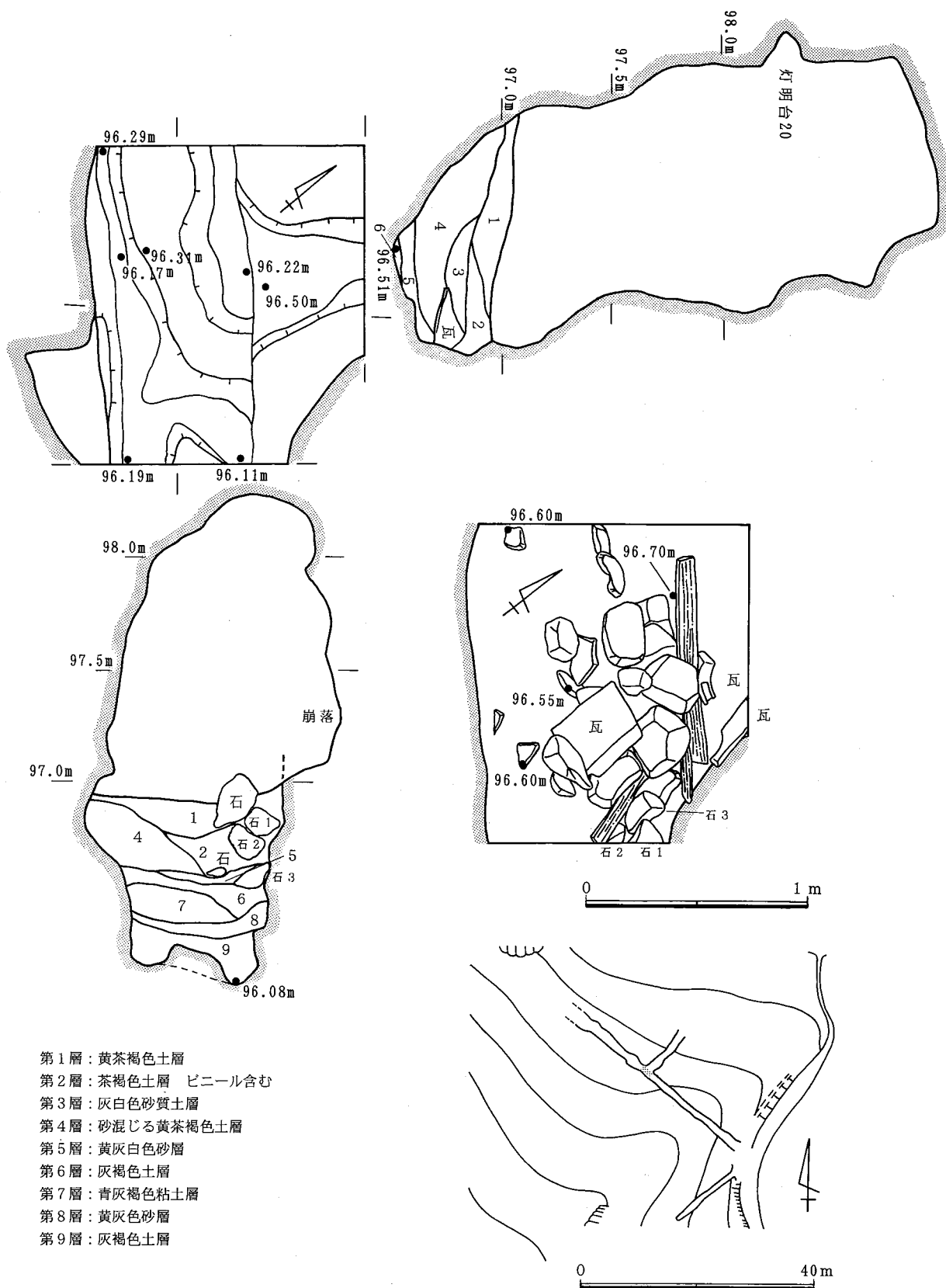
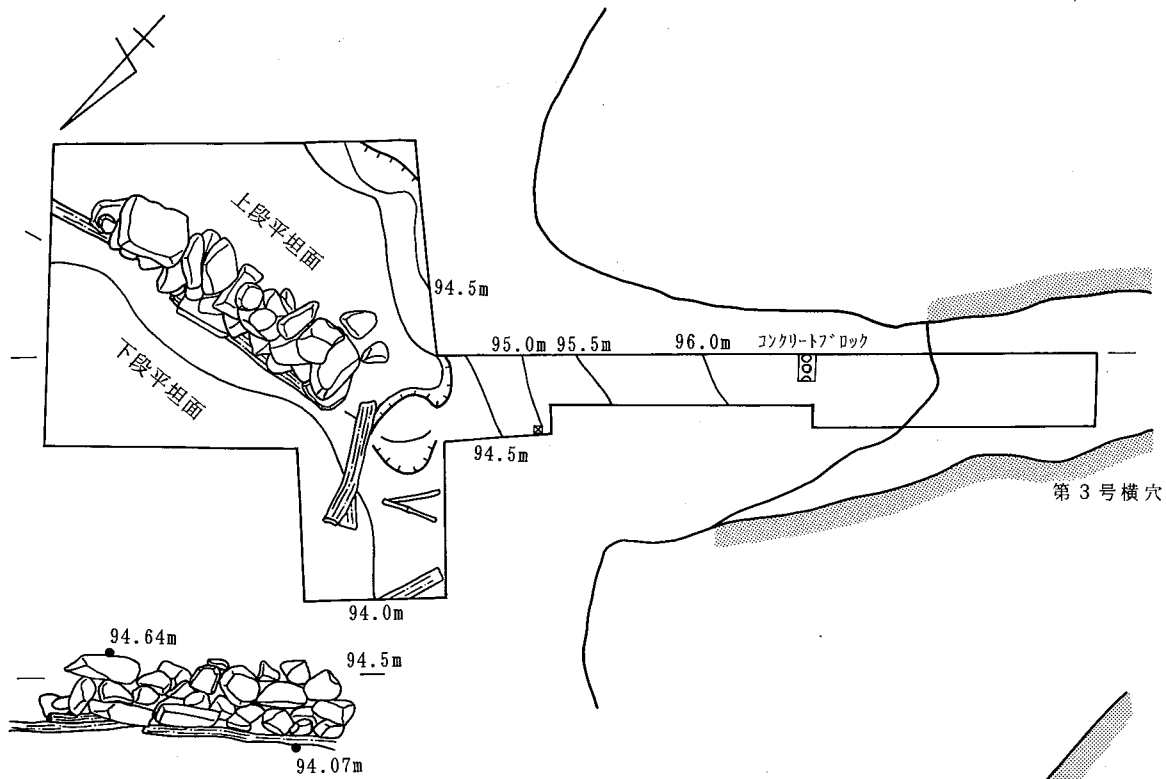


図10 第2・3号横穴結合部 (G区) 平面図・断面図



- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| 第1層：表土層       | 第18層：礫混じり赤灰褐色砂層 |
| 第2層：明茶褐色粘質土層  | 第19層：灰茶色土層      |
| 第3層：黄褐色砂層     | 第20層：赤灰褐色砂層     |
| 第4層：黄褐色粘質土層   | 第21層：灰黄褐色粘質土層   |
| 第5層：茶褐色砂層     | 第22層：明灰褐色砂層     |
| 第6層：暗黄褐色粘質土層  | 第23層：暗黒褐色粘質土層   |
| 第7層：黒褐色砂質土層   | 第24層：灰褐色粘質土層    |
| 第8層：明茶褐色砂質土層  | 第25層：黒褐色粘質土層    |
| 第9層：黒褐色土層     | 第26層：暗灰褐色粘質土層   |
| 第10層：暗茶褐色土層   | 第27層：明褐色粘質土層    |
| 第11層：灰茶褐色砂層   | 第28層：明灰褐色粘質土層   |
| 第12層：茶色粘質土層   | 第29層：茶褐色粘質土層    |
| 第13層：淡灰茶褐色砂層  |                 |
| 第14層：暗茶褐色泥質土層 |                 |
| 第15層：灰褐色粘質土層  |                 |
| 第16層：灰茶褐色粘質土層 |                 |
| 第17層：暗茶褐色粘質土層 |                 |

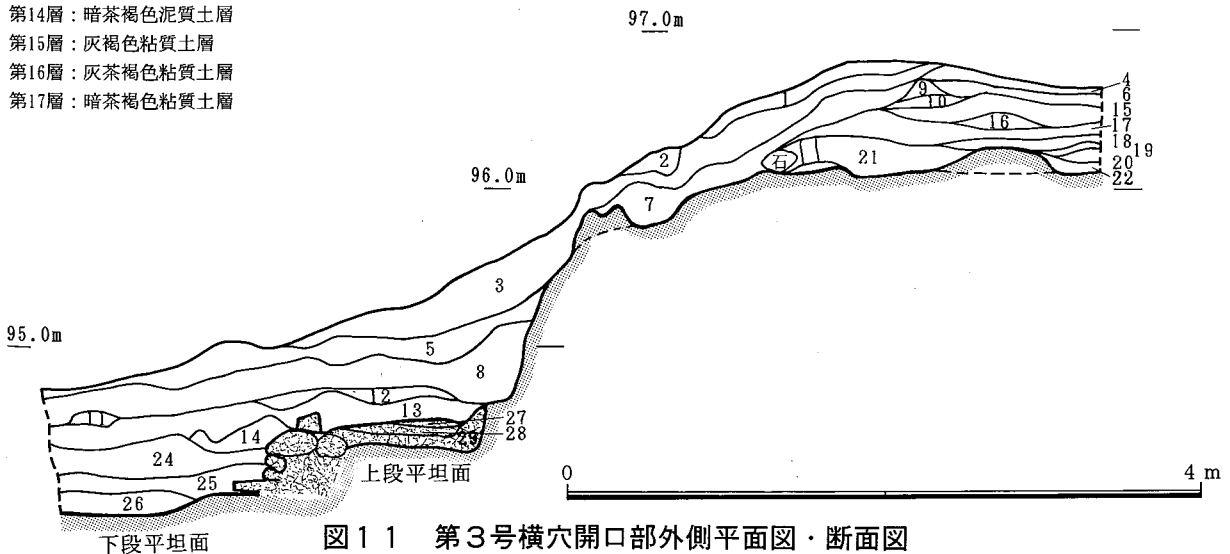
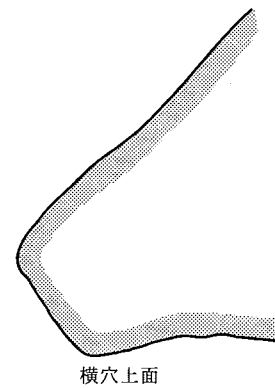


図11 第3号横穴開口部外側平面図・断面図

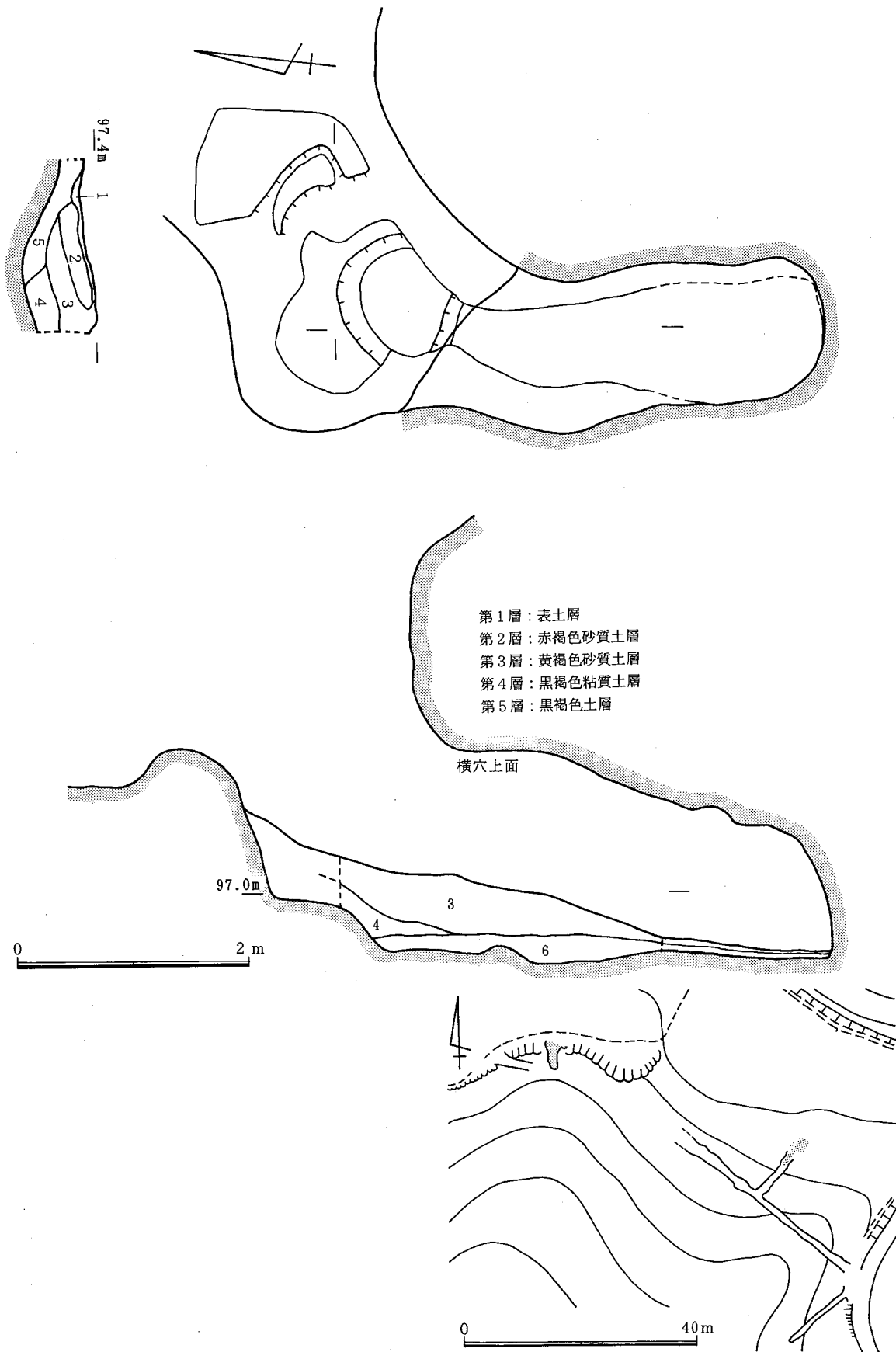


图12 第4号横穴平面図・断面図

## V. 出土品

発掘区A～H区の出土遺物は総数88点である。第2号横穴内からは瓦1点とガラス片1点、第2号・第3号横穴結合部からは瓦2点、第3号横穴前面部からは陶磁器・ガラス製品・鉄製品が出土している。全出土遺物のうちわけは磁器が46点、陶器が21点、ガラス製品が10点、石製品が2点、金属製品が9点である。図13:1～15、図14:16～34は磁器、図15:35～42、図16:45～48は陶器、図15:43～44は石製品、図17:49～51はガラス製品、図17:52～57は金属製品である。

### 1. 磁器 (図13, 図14)

1～6, 17は型紙を用いて染付の刷絵を施した磁器。1, 2は高台内に蛇の目状の釉剥ぎをする皿。胴部以上はロクロで成形後、型押しにより十六角の輪花皿にしている。見込には松竹梅文を環状に配する。3は口縁端部が外反する碗の口縁部片。4, 5は腰部が張り、開きながら直行する口縁をもつ碗。6は腰部が丸い筒形の碗。17は口縁部がやや開きながら直行する碗。7～10, 14, 15, 18は手描きで染付文様を描いた磁器。7は丸形の碗の底部片で、高台内は深く削り込み、見込が薄くなる。8は口縁部が外反する碗で、釉は黄白色を呈し気泡を多く含む。9は腰部が円い筒形の碗。10は内外面に濃紺色の呉須で笹竹を描いた丸形の碗。14は丸形の碗の胴部片で梅花を描く。15は口縁端反りの小皿、内面口縁端部に波状文を施す。18は素地が灰色がかり、器形は腰部から口縁部に向かい肥厚し、口縁端部がとがる。12, 16, 21, 24, 34は銅版印刷技術を用いて呉須を転写した染付磁器。12は六方に円圏に囲まれた亀甲文・青海波文・七宝文・山水風景などを配した丸碗、高台下端がひらく。16は十六角の輪花皿、高台内は無釉で、欠損するが蛇の目状に釉剥ぎすると推定できる。21は見込に円圏に囲まれたネズミと馬を描写する碗底部片。24は碗の口縁部片。34は瓶底部、外面にヤツデを描写し、内面も施釉。27はゴム印で文様を施した碗。25, 26は染付圏線のみが施される碗口縁部片。11, 13, 19, 20, 22, 23, 28～33は色絵。11は小丸碗で、高台下端がやや開く。上絵付で、高台脇には朱色の太めの圏線、胴部外面には朱色と緑色で草花を描く。13, 19, 22, 23は染付と緑色の釉下の銅板転写を併用している。13は丸形の碗、扇に描かれた花文内の線と梅花のつぼみの数個が緑色で他は呉須。19は菊の花弁と渦巻文が呉須で他は緑色。22は文様部が欠損するが緑色で「壽」、呉須で「春秋」「吾年」の文字は残る。23は坊主の袈裟が緑色、他は呉須。28は丸碗の口縁部片で外面に黄色の帯をめぐらす。20, 29, 30は同じ器形。20は高台脇に呉須の細い圏線をめぐらし、文様の枝部が茶色の鉄絵、花弁が暗い紺色、花心が朱色。29は高台脇に呉須の太い圏線をめぐらし、笹の枝部が薄い茶色の鉄絵、葉が呉須。30は笹の葉が呉須、枝が緑色、丸い小さな実状のものが朱色、刷毛目装飾が薄い茶色の鉄絵。31は上絵付が剥離して模様が確認できるのだが、鳳凰文を外面に描いた碗。32, 33は丈の高い筒形の碗。32は鑄込みにより八角および胴部下半以下の凹凸文様を成形している。胴部下半から高台脇まで茶褐色の鉄釉を施し、上半には染付で細草、金色と赤色で大輪の菊花、その茎と葉は緑色で描く。33は高台脇から外面全体にかけて朱色の釉、高台部と内面は透明釉、胴部には帯状に金色に縁取りし、内部を銀色で埋めた七宝文を配する。高台内側の底部は非常に薄い。

染付磁器のうち呉須の呈色は9, 14, 15を除いて鮮やかな酸化コバルトの青色である。

### 2. 陶器 (図15, 図16)

35は鉢で高台部を除き黄緑灰色の灰釉を施す。見込の周囲には胎土目の剥離痕が1つ残る。ロクロで削り出した高台内には、2本の平行するヘラ削り線がある。36は丸形の碗底部で灰色の胎土に内外面に白化粧土を全面に施し、茶褐色の鉄絵で圏線、呉須で文様を描き、その上に透明釉をかける。高台内の削り込みは深く、見込の素地厚は薄い。37は器壁の薄い碗底部、高台部を除き黄白色の釉を施す。高台

内の削りによる円圈内には朱色で裏銘「九谷」、内面見込には上絵(色不明)により「専徳寺」銘がはいる。38は土瓶の口縁蓋受け部、素地は黒褐色で、無釉部は茶褐色を呈す。内面蓋受け部以下のように鉄釉を施し、外面には縦方向に飛び鉋による刻線文を全面に施す。39は型作りによる袋物と思われる底部、外面に黒色釉、内面に灰釉を施す。底部から腰部にかけて放射状に凹線が型作りされる。40は半磁胎の瓶、外面に呉須で文字を書く。41は播鉢で内面鉄釉、外面黄色釉。口縁下外面には2本の浅い溝による口縁帯をもち蛇の目状の幅広い高台をもつ。櫛目は1単位20本で見込中心から放射状に隙間をあげずに施す。42は土管の受け部、全面に鉄釉を施す。45は口縁帯をもつ播鉢で、よく焼き締まった胎土の外面に茶褐色の鉄釉を施す。また、外面には2本の突帯がめぐる。46は甕の口縁部で、外面および内面頸部下まで鉄釉を施す。口縁上面は釉をふき取る。47, 48は鎌軒瓦で全面に光沢を持つ暗茶褐色の鉄釉を施す。形で施文された瓦当部には、両端が二つに分かれる枝状の文様を五弁花文の両側に配する。上位の瓦と重なる基部には2小穴が穿孔されるが、47では小孔内に銅線が残る。

### 3. 石製品 (図15)

43は砂岩製の棒状の砥石。44は粘板岩製の小板片、一方の面には掻き傷がある。

### 4. ガラス製品 (図17)

49は瓶、茶色で肩部下に「DB TRADE © MARK」、裾部に「DAINIPPON BREWERY Co. LTD」の銘がある。50, 51は瓶の口縁部、50は青緑色で外面口縁下に径3mmの丸い穴がある。51は茶色で口縁下に上下に溝をもつ突帯がある。

### 5. 金属製品 (図17)

52は銅製の飾金具、二等辺三角形の垂飾形で、中程で段をもつ。径2mmの釘孔が7つと径4mmの孔が2つ貫通する。53~57は鉄製品。53は直径約5.5cmの円形板と長さ約9cmの円柱棒の組み合わせ。54はやや扁平な棒状でゆるくS字に湾曲する。55は片刃で刃部には鞘と考えられる木質が残る。56は弧状に湾曲する板、基部を貫通する鉄製の小棒と、リング状の環が残る。曲鎌の柄部。57は緩い弧状の板、曲鎌の刃部。58は弧状に湾曲する小棒。

### 裏銘「九谷」の陶器碗の上絵「専徳寺」銘について

本遺跡では「専徳寺」銘の碗底部が出土した。『加越能寺社由来』において、専徳寺は江戸~明治期に石川・富山両県内に九寺ある(表3)。その中で一番近い寺院は同じ河北郡浅川村に位置する、字若松の真宗大谷派の松扉山専徳寺である。『石川県河北郡史』405頁に「専徳寺。字若松に在り。真宗大谷派にして院家地となす。開基は本願寺蓮如の子蓮悟なり。蓮悟の上洛するに及び、當寺は一旦中絶せしが、天文元年念西といふ者來たりて、名蹟の滅絶せんことを憂ひ、現今の所に寺坊を建つ。松扉山専徳寺即ち是なり。」と記載される。

出土した上絵陶器「専徳寺」銘碗は、横穴から徒歩10分ほどに所在する若松の専徳寺からもたらされたものであろう。

### 「DAINIPPON BREWERY Co. LTD」銘のガラス瓶について

DAINIPPON BREWERY Co. LTDは、大日本麦酒株式会社の英訳でDBはその商標である。大日本麦酒株式会社は明治39年(1906)3月に日本麦酒株式会社、大阪麦酒株式会社、札幌麦酒株式会社の三社が合同して設立されたビール醸造会社である。各地のビール醸造会社を吸収しながら拡大したが、第二次世界

大戦後昭和22年(1947)の過度経済力集中排除法をうけて昭和24年(1949)9月、朝日麦酒株式会社と日本麦酒株式会社の2社に解体された[アサヒビール1990]。製造年代は大日本麦酒株式会社の存続した1906～1947年の41年間である。

表3 石川県・富山県の専徳寺

所在地	宗派	三州寺号帳	寺社由緒書上 (1685年)	石川県寺院明細帳 (1880年)
石川県金沢市若松町	浄土真宗大谷派	○	○	○
石川県鹿島郡能登島町	浄土真宗大谷派	○	○	○
石川県鳳至郡和田村	浄土真宗大谷派	○	○	○
富山県福光町	浄土真宗本願寺派	○	○	
富山県氷見市	浄土真宗本願寺派	○	○	
富山県東砺波郡城端町	浄土真宗大谷派	○	○	
富山県中新川郡立山町	浄土真宗本願寺派	○	○	
富山県上新川郡中村	浄土真宗大谷派	○	○	
富山県下新川郡入善町	浄土真宗大谷派	○	○	

VI. 聞き取り調査

過去の横穴周辺の状況を、金沢市角間新町在住の山口與吉氏(1916年生)、坂喜久枝氏(1923年生)、角江光子氏(1944年生)、大島仁美氏(1947年生)から1996年に伺った。聞き取り日は山口氏に8月20日、大島氏、角江氏に9月2日、坂氏に9月3日である。全員1987年に上角間地区から角間新町に転居した。

山口與吉氏談話

1～5は山口氏が生まれた当時以前から、1987年まで存続していた状況である。7～11は開始時期が不明である。

1. 第2号横穴と第5号横穴および第3号横穴は、周辺の谷地内及び角間川周辺の水田へ水を供給する用水施設である。
2. 用水は、第2号横穴に流れ込み、第3号横穴と第5号横穴から流れ出た。
3. 第2号横穴奥で落盤したため土管を埋設して第5号横穴へ用水を通していた。
4. 第5号横穴より流れ出る用水は、谷地入り口付近を北方向に流れていた。
5. 第1号横穴は存在していたが、用途は不明。
6. 第1・2号横穴前面を通る農道は山口氏が30歳の頃(1945年頃)に造成された。
7. 第3号横穴開口部は小坂家の裏側にあり、開口部から流れ落ちた用水は小坂家の生活用水であり、飲料水には井戸水を用いた。
8. 第3号横穴から流れ落ちた用水は北西方向の山際に沿って流れ、小坂家と、西側に隣接する山口家(聞き取り調査協力者である山口氏宅)との住居の間を流れ、角間川に注いだ。
9. 第2・3号横穴結合部には、分水を調節する施設が作られていた。第2号横穴から第5号横穴が本流(農業用水)で、支流の第3号横穴(生活用水)には恒常的に少量の水を流した。
10. 毎年1回「用水アゲ」という堆積物をさらう作業をした。
11. 第4号横穴は、上角間地区在住の武田家が所有した「いも穴」(さといもの貯蔵穴)だった。

坂喜久枝氏、角江光子氏、大島仁美氏談話

12. 上角間地区は大正～昭和年間には水田耕作が生業の中心であった。そのほか、各家庭消費の野菜栽培・炭焼きを行っていた。

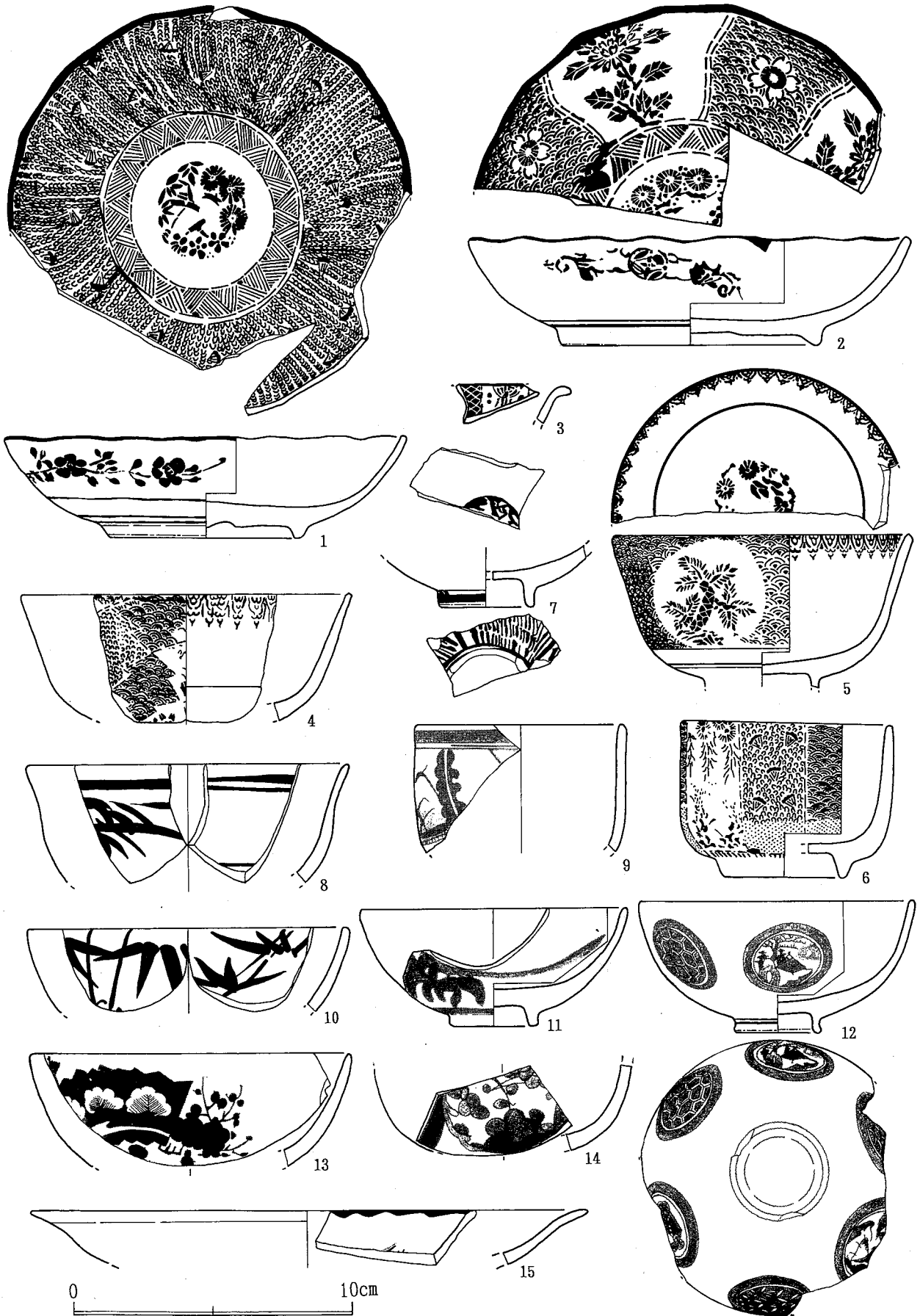


图13 第3号横穴外(B区)出土磁器

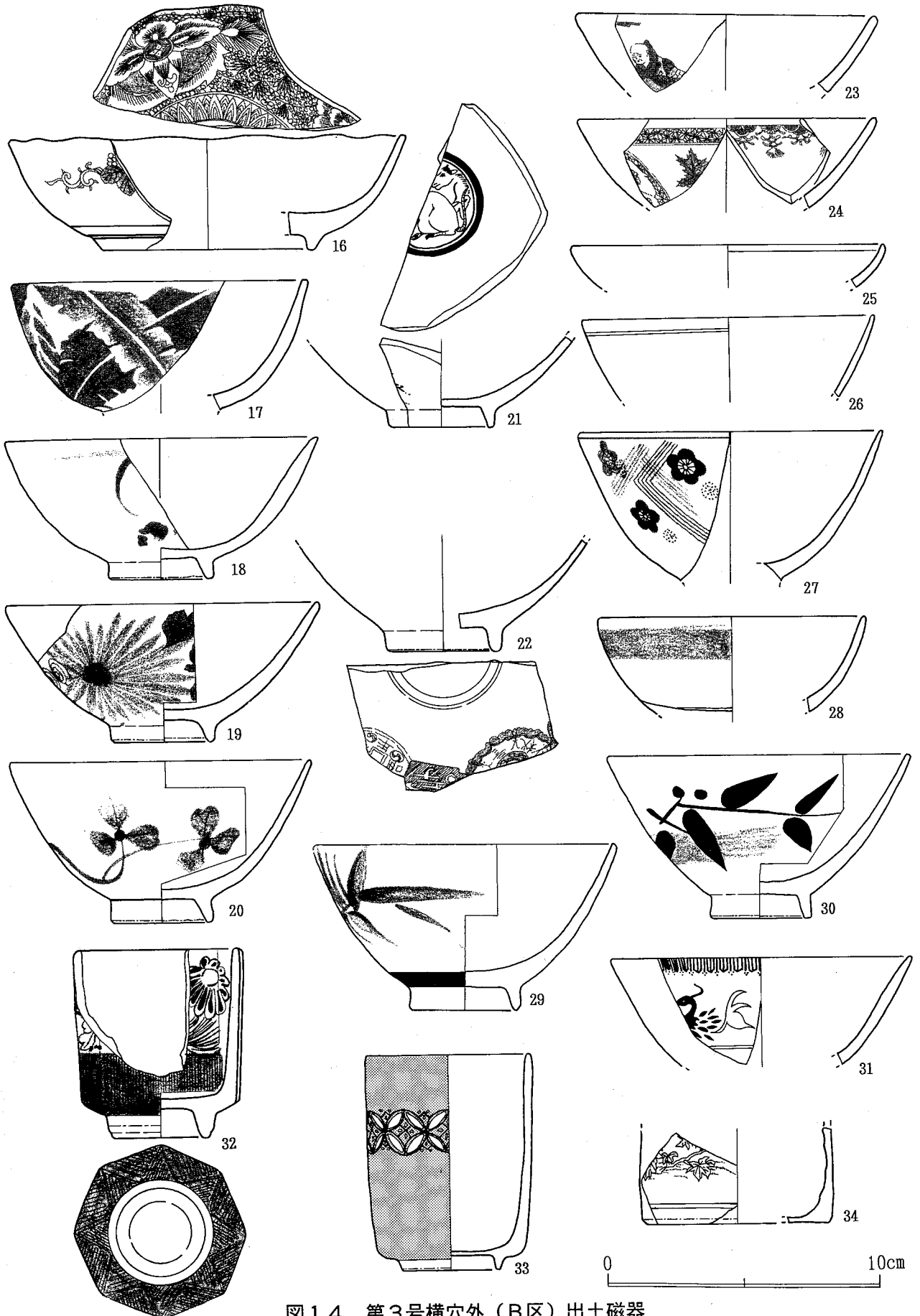


图14 第3号横穴外(B区)出土磁器



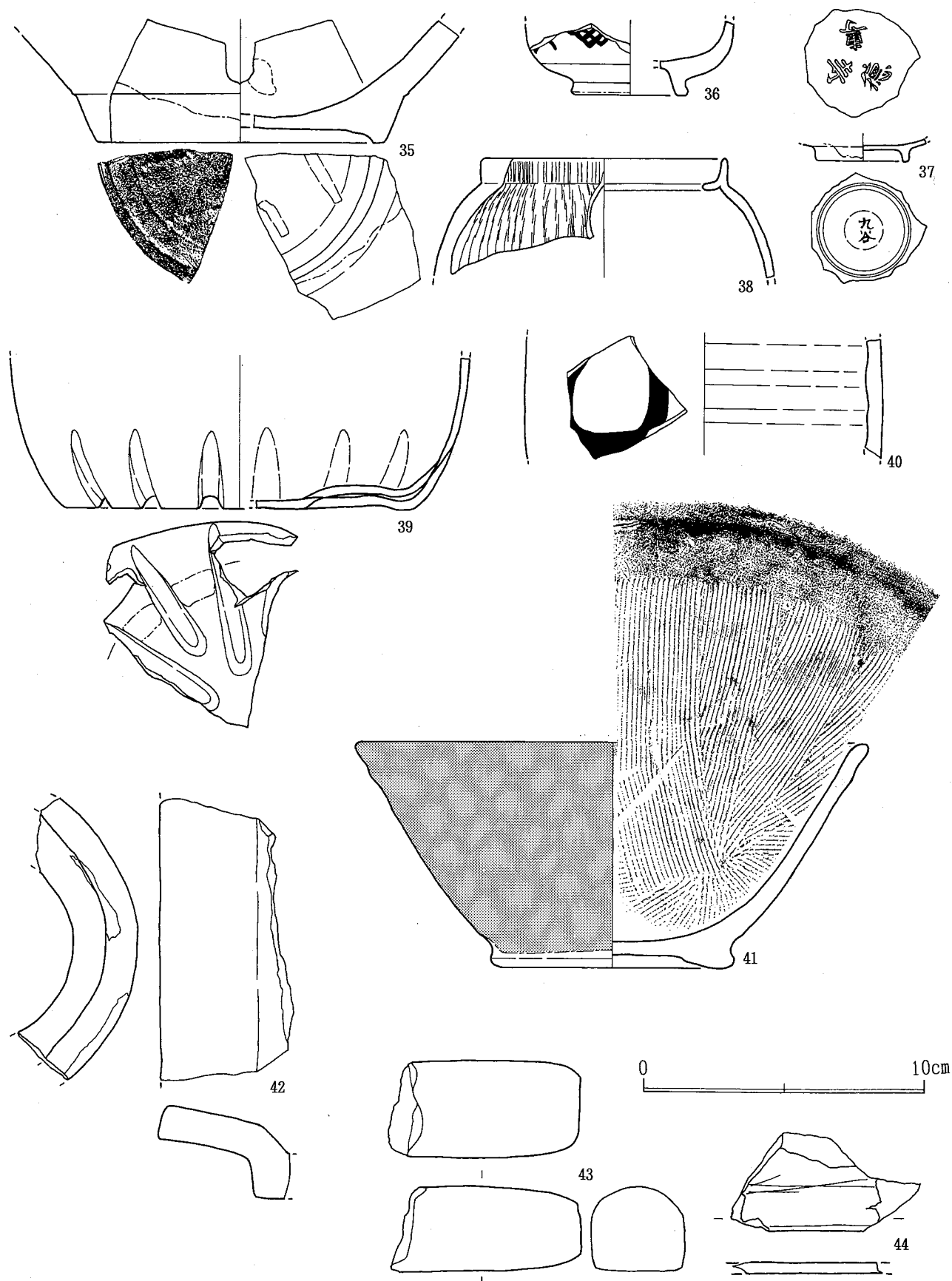


图15 第3号横穴外(B区)出土陶器・石製品

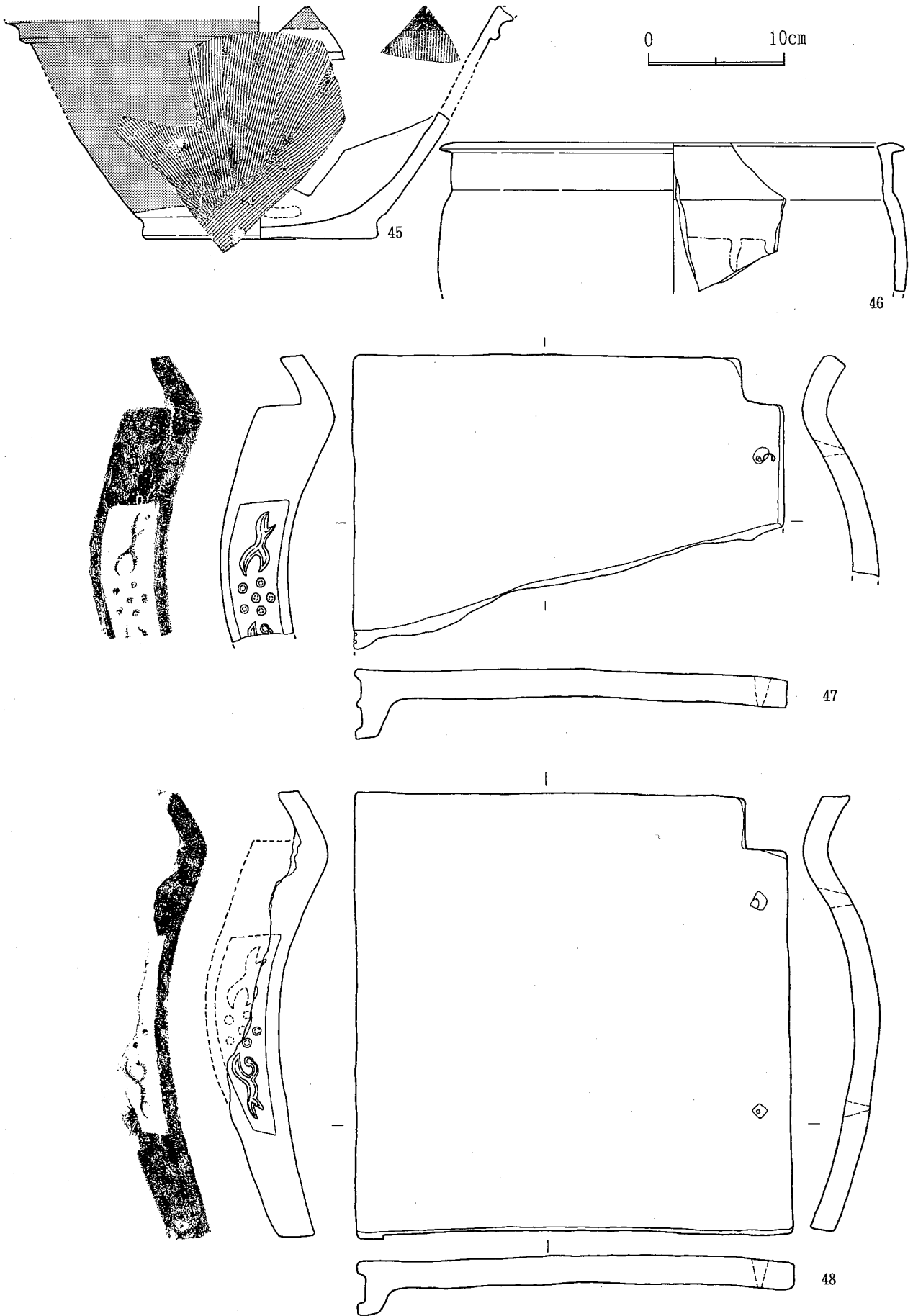


图16 3号横穴外/2·3号横穴結合部出土遺物(陶器)

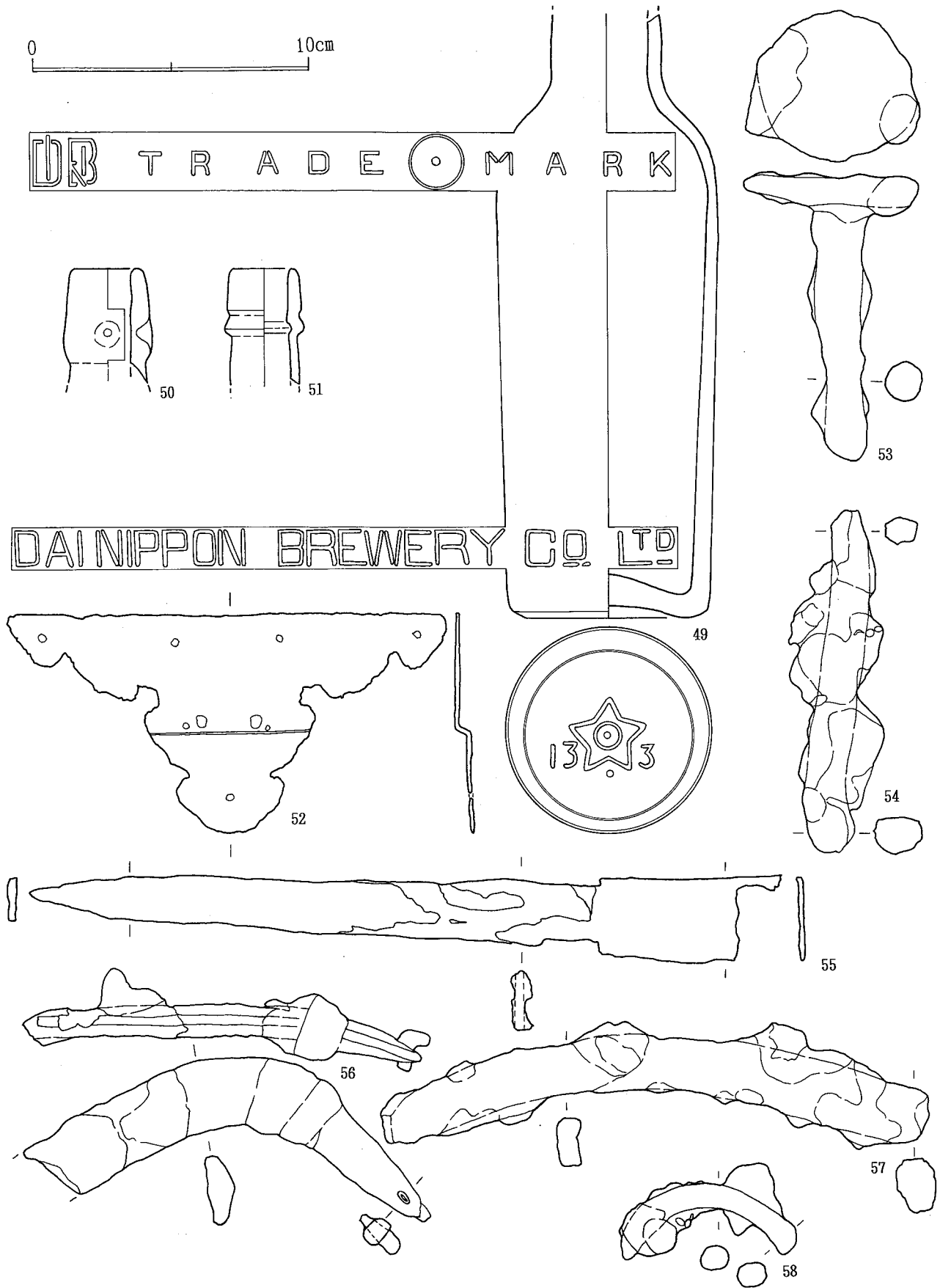


図17 第3号横穴外(B区)出土ガラス瓶・銅製品・鉄製品

13. 大正年間～昭和25年(1950年)頃まで、上角間地区の住民は専ら地区内で農業に従事していたが、昭和25年(1950年)頃以降からは地区外でも働くようになった。
14. 大正年間の上角間地区戸数は12～13戸、昭和年間には戸数が減少し、昭和42年(1967年)～昭和62年(1987年)には上角間地区の戸数は4～5戸だった。
15. 井戸を持たない家は付近の山よりしみ出る水を竹筒で集めて飲料水にしていた。上角間地区には井戸が最多で5基あった。

## VII. 構造と掘削方法・用途・年代

### 1. 第1号横穴

第1号横穴は、開口部から11.8m奥で止まる。横穴奥は掘削を止めたため行き止まりである。通路や用水としては機能していない。横穴奥は開口部付近と同じく一人が通れる幅であり、倉庫を構築する目的で掘削されたとは考えられない。第1号横穴開口部外側を横切る溝遺構底面は第1号横穴開口部底面より標高が低く、開口部からは用水が流れ込む構造ではない。第1号横穴掘削の目的としては、山体からの湧水を得るための横方向の井戸の可能性はある。しかし、第1号横穴は水脈にあたることなく掘削が中断され、そのまま放棄されたのであろう。

### 2. 第2号横穴・第5号横穴・第3号横穴

第1号横穴前面を横切る水路は第2号横穴内部に流れ込む。これは聞き取り調査と合致する。第2号横穴内部～外側のc1-c2断面図では、水路1が第2号横穴底面に直接掘り込まれている。よって、第2号横穴は水路1を引き込むために同時期に掘削されたのだろう。第2号横穴は開口部から約36.80mの位置で行き止まりとなっているが、聞き取り調査により本来は第5号横穴とつながっていたことが判明している。行き止まり付近は落盤の形跡があり、聞き取り調査からも約80年前にはすでに落盤部分に土管を設置して用水を第5号横穴へ通していたことが判明している。土管の設置については調査では確認していない。第5号横穴は第2号横穴の延長線上に位置しており、標高は堆積土上面で96.44mである。第2号横穴開口部での底面標高は96.40m、今回の調査では各横穴開口部付近の堆積土の平均的な厚さは50cm前後であることから、第2号横穴開口部から第5号横穴開口部へ水が流れたと推定できる。第2号横穴から第5号横穴に用水を通す目的は、第5号横穴開口部周辺の水田への用水の供給であろう。同様の指摘は聞き取り調査でも得られた。第5号横穴付近の水田は、取水源となる角間川よりも河川改修前で標高が約10m高い。角間川上流の、水田より標高が高い地点で角間川から用水を引き、水田より高い標高を維持しながら尾根の麓をめぐるせていたのであろう。横穴が所在する舌状尾根の北東部には民家(聞き取り調査から小坂家と判明)が存在していたために、民家を避け尾根の反対側(北西側)谷地入り口付近の水田に用水を引くために横穴が掘削されたのであろう。

聞き取り調査から第1・2号横穴前面を通る農道が造られたのが1945年頃であることが判明した。この造成層は、第1号横穴開口部外側のa1-a2・b1-b2断面図では第19層であり、第2号横穴開口部外側のc1-c2断面図では第23層であろう。第2号横穴開口部外側の断面図から水路2・3は造成層(第23層)より新しい時期である。水路2・3は1945年頃以降に水路2～水路3の順で掘り込まれたであろう。

第3号横穴は第2号横穴にT字状に結合している。第2号横穴が用水であり、第3号横穴底面が結合部から開口部に向かって下るので、水は結合部から第3号横穴開口部に流れていたであろう。聞き取り調査から、第2号(第5号)横穴の主流より生活用水として第3号横穴へ分水するための施設が、第2・3号横穴結合部に存在したことがわかっている。発掘調査で、結合部から出土した瓦、木材、石は、そ

の施設に関連するであろう。第3号横穴が掘削された時期は、第2号横穴との結合部での土層堆積状況から推定できる。第2号横穴側の底面に堆積する3層(第9~7層)は第3号横穴側には堆積していない。第3号横穴側の底面直上に堆積する第6層は、第2号横穴側では第7層の上に堆積する。第6層より上層は、一部を除き第2号横穴側と同じ堆積土層をもつことから、第2号横穴の第9~7層堆積後に第3号横穴が掘削されたであろう。第3号横穴は壁に残る掘削痕は、第2号横穴結合部から第3号横穴開口部に向かって作業を行ったことを示している。

石積みで土留めされた上段平坦面は、急傾斜面からの崩落土を留めて、石積み前方に位置した小坂家の屋敷地を保持するための施設だったのだろう。第3号横穴開口部外側には2か所の穴があり、第3号横穴開口部から用水が急傾斜面を流れ落ちたことがわかる。第3号横穴開口部北西方向の山際には溝状の窪みがあり、第3号横穴から流れ落ちた用水はその溝状の窪みを流れたであろう。その流れの先は、小坂家の西際を流れて角間川に注ぎ込んでいたことが聞き取り調査でわかっている。

第2号横穴壁面に残る掘削痕からは、使用された工具が2種類推定できる。1つは刃幅20cm~30cmの先の平らな鋤、もう1つは尖頭具である。掘削痕は横穴開口部から奥方向に刃を入れており第2号横穴開口部から奥に掘り進められたと考えられる。幅20cm~30cmの線状の先の平らな鋤の痕は底面から高さ約140cmまでは垂直に痕跡を残し、底面から高さ140cm以上では横穴開口部から奥に斜めに上がる線状の痕跡を残す。尖頭具の痕跡は、底面から高さ140cm以上で先の平らな鋤の痕とともに残る。これらの痕跡から、底面から140cm以下の高さでは、開口部から奥に水平に鋤の刃を押し出し、底面より140cm以上の高さでは、開口部から奥に斜め上方に鋤の刃を押し出して壁面を削ったのであろう。横穴内部は一人一人が通れるほどの幅と高さであることから、少人数によって掘削されたと考えられる。

横穴が掘削された地層は軟質の黄褐色砂岩で、落盤や崩落が頻繁に起きたであろう。第2号横穴開口部付近での横穴の輪切り状断面上半分は崩落により大きく広がり、第3号横穴との結合部より奥でも同様に崩落によって最大幅約220cm、堆積土上面から天井までの高さが最大で約230cmとなる。

用水は、聞き取り調査から1915年頃には存在していたが、発掘調査で発見された最も古い水路1の底面付近での出土遺物がなく年代は不明である。水路2・3は1945年頃につくられた農道の造成層よりも新しい。水路2内に堆積する第11層で出土した瓦(KY95T2-97)や水路3内に堆積する第9層で出土したガラス製品(KY95T2-98)から、水路2・3は江戸時代にまでは遡らないであろう。

### 3. 第4号横穴

第4号横穴の用途は、堆積土中より出土した扉と考えられる木製部材と聞き取り調査から、倉庫である。聞き取り調査から第4号横穴は上角間地区に在住の武田家が1987年頃まで使用していた「いも穴」(さといもの貯蔵穴)である。構築された年代については不明である。

## VIII. 角間川流域の横穴

角間地域は江戸時代に加賀国河北郡角間村であった。角間村という地名は明治22年まで存続する。正保3年(1646年)に幕府提出の『正保郷帳(加能越三ヶ国高辻帳原稿)』では隣接する中山村と並記され、高226石、田方6町8反余・畑方8町2反余、新田61石余で、『三箇国高物成帳』では寛文10年(1670年)の村御印は高144石余、小物成は山役10匁、蠟役1匁である[平凡社地方資料センター編1991, p.530]。天保10年(1839年)の『河北郡六組高免鋤米村数書記申帳』(金沢市立玉川図書館蔵)で角間村は草高147石である。安政2年(1855年)の『河北郡高免定納口米家数人数書上申帳』(金沢市立玉川図書館蔵)で角間村は草高147石、総家数27軒(内26軒百姓家)、総人数175人である。明治22年~40年は金浦村大字角間とな

る。明治22年(1889年)の角間の戸数は34戸、人口177人。明治40年に浅川村大字角間になる。昭和32年(1957年)に金沢市角間町になる。昭和45年(1970年)の角間町の世帯数18戸、人口92人 [竹内編 1981, p.236]。

表4 角間の草高および戸数・人口推移

年号(西暦)	草高	免	戸数	人口	備考・出典
正保3年(1646)	226石	五ツ三歩			『正保郷帳』(加能越三ヶ国高辻帳原稿) (中山村併記・新田61石)
寛文10年(1670)	144石	五ツ三歩			『三箇国高物成帳』
天保10年(1839)	147石	五ツ三歩			『河北郡六組高免歛米村数書記申帳』
安政2年(1855)	147石	五ツ三歩	27戸	175人	『河北郡高免上納口米家数人数書記申帳面』
明治22年(1889)			34戸	177人	『角川日本地名大事典17 石川県』
昭和45年(1970)			18戸	92人	『角川日本地名大事典17 石川県』

金沢市内には多くの用水があるが、その中でも辰巳用水は調査研究 [高堀編 1983]が進んでいる。辰巳用水は犀川上流辰巳地区から金沢城まで総延長11kmで、寛永9年(1632年)築造が開始された。辰巳用水は河成段丘上、および段丘崖の斜面を通る部分が多いが、取水口に近い部分では横穴を掘る。

第2号(第5号)横穴、第3号横穴と辰巳用水横穴部分の類似点は、横穴断面形態が縦長の楕円形である点、横穴底部に土砂が堆積し底面が平坦である点、内部に灯明台がある点である。辰巳用水が主に新第三紀中新世中期の砂子坂層という砂礫層を掘削し崩れやすい大桑層を避けているが、第2号(第5号)横穴は崩れやすい黄褐色砂岩の地層を掘削している点、大きさ、長さ、幅、高さは辰巳用水の方が規模が大きい。辰巳用水では軟弱地盤を掘削した部分には補強のために瀬領石(角石)や人頭大の安山岩礫を積んだり丸太を天井に渡しているが、第2号(第5号)横穴、第3号横穴には同様の施設はない。辰巳用水の勾配値は横穴部分である東岩取水口～湯ノ谷隧道出口間の距離5971.00mで標高差10.55mであり(勾配値:56818分の1)、第2号横穴開口部～結合部間の距離は18.6mで標高差は0.14m(勾配値:133分の1)であり辰巳用水の方が勾配値が小さい。辰巳用水掘削工具はタガネ、ツルハシ、くさび状の鉄片が推定されるが、第2号(第5号)横穴、第3号横穴では横穴断面の高さ・幅が小さく軟質の砂層であるからツルハシでなく、掘削痕から先の平らな鋤が推定できる。辰巳用水は大規模で高度な掘削技術を用いた加賀藩の事業であるが、第2号(第5号)横穴、第3号横穴は角間・若松地域の小規模な事業であろう。

総合移転事業第I期に伴う発掘調査 [金沢大学遺跡調査委員会 1989]で発見された7基の隧道は本調査地点の北方約800mの角間地域の北部に位置する。隧道は角間地域の北部の谷地内に角間川を取水する新田開発の計画に伴い掘削され、F隧道を除き掘削途中で放棄されたと推定された。今回調査した第2号(第5号)横穴・第3号横穴と比較すると、7基の隧道は総長約200mであるB隧道をはじめ、合計総長約600mと大規模である。両者は断面形態と高さ、幅、底面の溝、掘削痕が類似し、尾根の中腹に掘削される。角間北部で発見した7基の横穴は幕末～明治初頭の築造と推定され、今回の角間南部の横穴も同時期に築造された可能性がある。

用水築造により新田が開発され、あるいは既存水田の生産高の増加となり、角間の米穀生産高が増加したことが予想される。しかし、17世紀中頃～19世紀中頃の文書に記載される角間村の米穀生産高は変化がない。第2号(第5号)横穴を含む用水は幕末から明治初頭に築造されたか、あるいは隠し田のために江戸後期に築造され生産高の変化が文書に現れなかったのだろうか。

## 結論

上角間横穴遺跡は、石川県金沢市角間町の金沢大学総合移転第Ⅱ期用地に所在する近世・近代の用水および貯蔵庫である。調査は1995年4月に開始され、1996年10月に終了した。調査面積は36.32㎡である。遺跡は4基の横穴から構成され、角間川南側に沿う舌状尾根の先端部麓に位置する。横穴の掘られた地層は軟質の黄褐色砂岩である。横穴の名称は東側から第1号横穴・第2号横穴・第3号横穴・第4号横穴・第5号横穴である。第2号と第5号は最長の1基の横穴であり、長さ70m、幅65cmである。発見した遺構は4基の横穴、第2号横穴に流れ込む水路、第1号・第2号横穴開口部外側の旧農道、第2号横穴内の20基の灯明台、第3号横穴内の1基の灯明台、第3号横穴開口部外側の石積みを伴う2段の平坦面である。第2号(第5号)横穴は周辺水田へ用水を供給した。第3号横穴は第2号横穴より新しく掘られ、第2号横穴から分水して生活用水を供給した。出土した遺物は第2号横穴開口部付近の水路内から瓦1点、ガラス製品1点、第2・3号横穴結合部から瓦2点、第3号横穴開口部外側から磁器47点、陶器17点、ガラス製品9点、石製品2点、金属製品9点である。出土品は、明治・大正・昭和の製品が多い。

## 謝辞

本報告作成に次の方々のご協力を得た。記して感謝。専徳寺住職松扉雅昭氏。角間新町山口與吉氏、坂喜久枝氏、角江光子氏、大島仁美氏。金沢市立玉川図書館近世資料室宇佐美孝氏、屋敷道明氏。アサヒビール株式会社大場雄二郎氏。金沢大学文学部中野節子氏。

## 文献目録

- 『河北郡六組高免鍬米村数書記申帳(亀田文書)』1839 金沢市立玉川図書館所蔵  
『河北郡高免定納口米家数人数書上申帳(亀田文書)』1855 金沢市立玉川図書館所蔵  
石川県河北郡役所 1920『石川県河北郡史』  
石川県図書館協会 1974『日本海叢書 第1巻 加越能寺社由来 上巻・下巻』  
竹内理三編 1981『角川日本地名大辞典 17 石川県』角川書店  
高堀勝喜編 1983『加賀辰巳用水』辰巳ダム関係文化財等調査団  
里見信生,小池博,本田郁夫 1984『金沢大学移転地(角間)の調査報告書 — 植生 —』金沢大学理学部  
金沢市教育委員会 1984『旧十村役 亀田家調査報告書 金沢市文化財紀要』49  
金沢大学遺跡調査委員会 1989『角間・金沢大学総合移転用地内埋蔵文化財調査報告』金沢大学  
アサヒビール株式会社社史資料室 1990『ASAHI 100』  
平凡社地方資料センター編 1991『日本歴史地名体系 17 石川県の地名』平凡社  
中村健二 1994『山の民物語 — 医王山西南麓の史・資料集』北国新聞社  
佐々木達夫,中村慎一,岩田安之,湯尻修平 1995「金沢大学総合移転第Ⅱ期計画地内埋蔵文化財報告・1995年3月」  
『金沢大学考古学紀要』第22号, pp.237-259

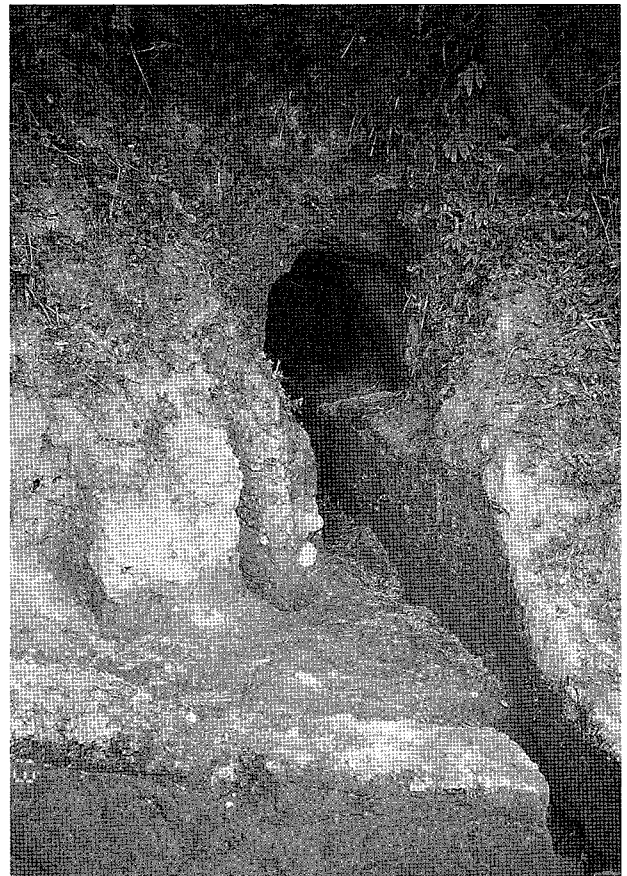
図版 1



第1号・第3号横穴（南西を望む）



第1号横穴開口部（南西を望む）



第2号横穴開口部（北を望む）



図版 2



水路および堆積土層（北を望む）



第2号横穴前面斜面と堆積土層（北西を望む）

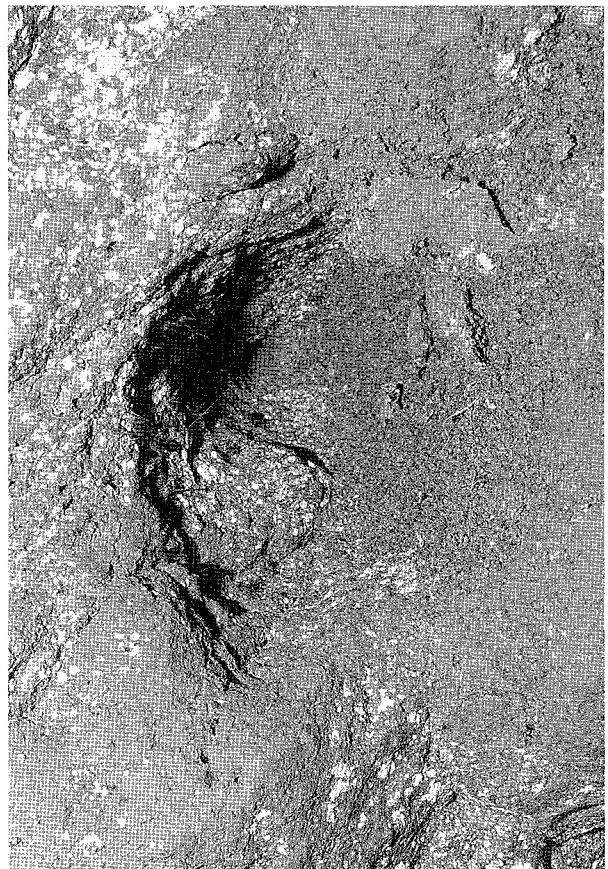
図版3



第2号横穴西壁面の掘削工具痕（西を望む）

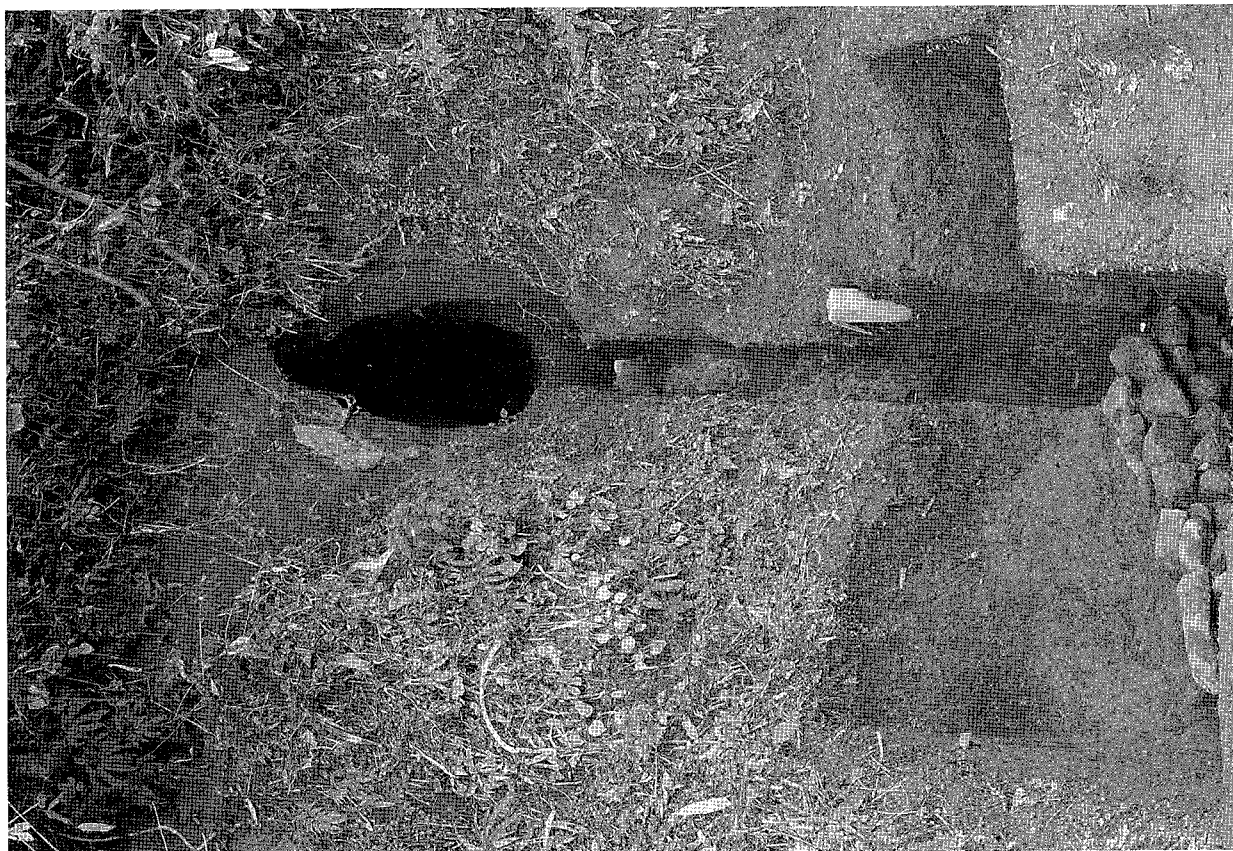


第2号・第3号横穴結合部出土の石と瓦（南東を望む）



第2号横穴内灯明台

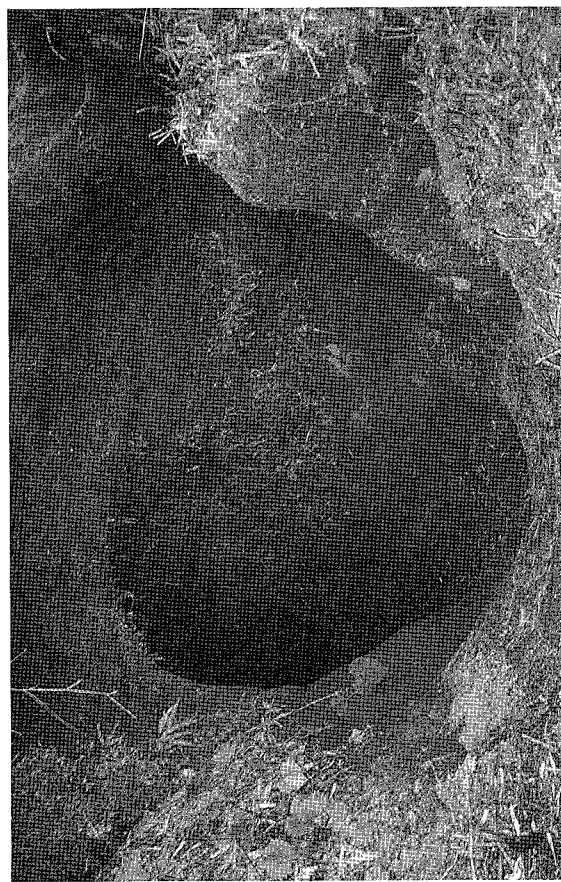
図版4



第3号横穴開口部と石積み（南西を望む）

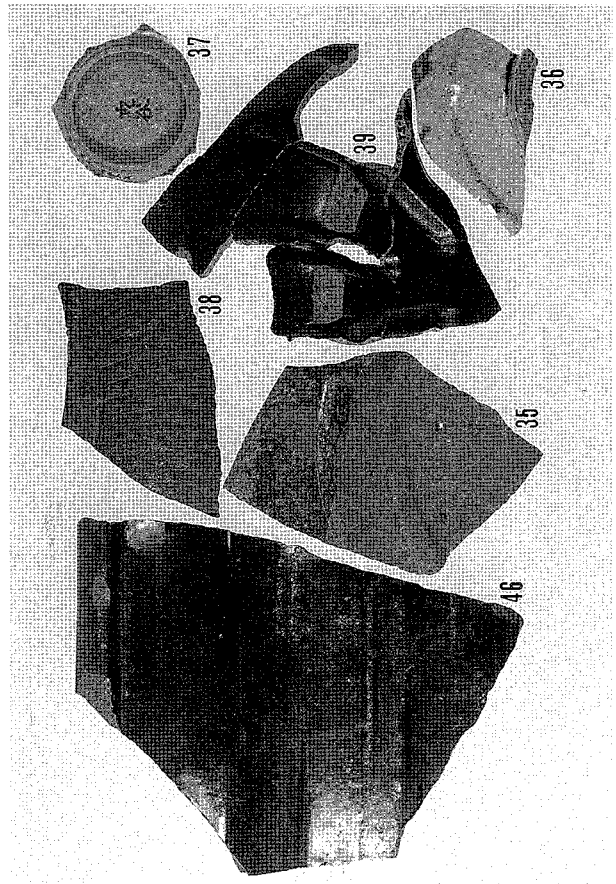
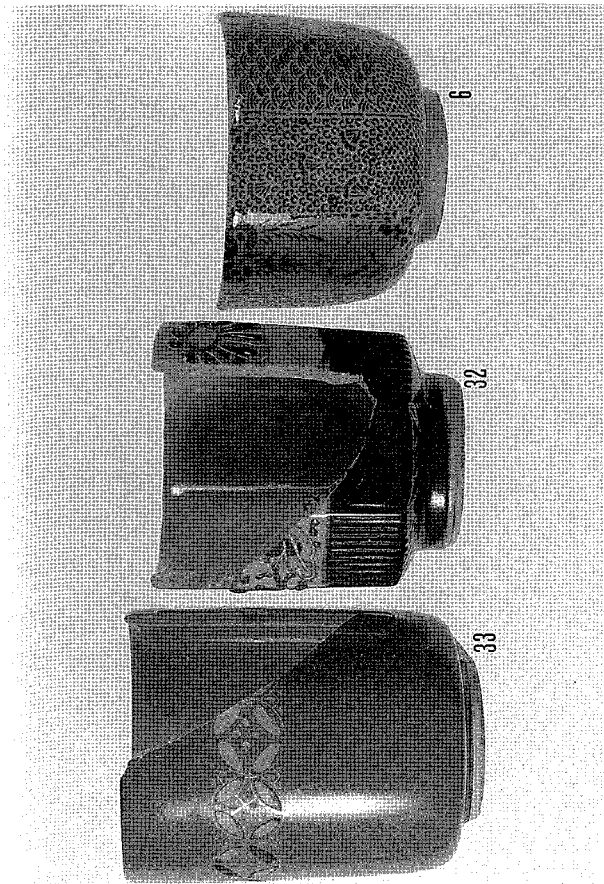
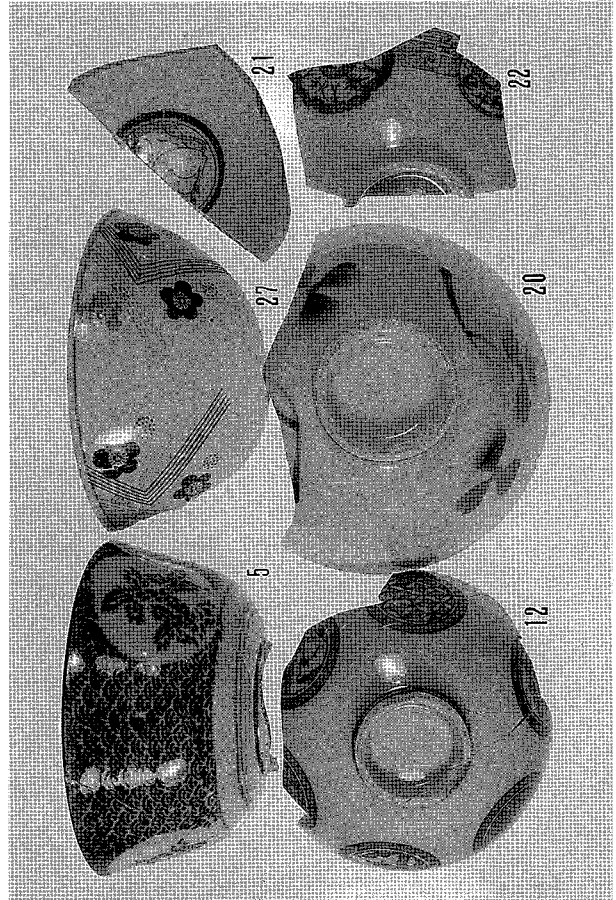
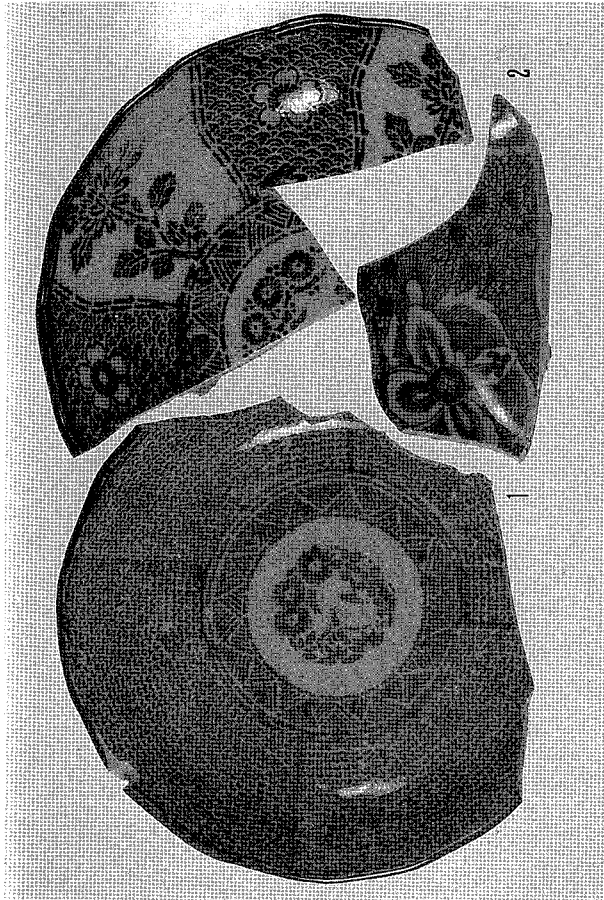


第3号横穴開口部外の石積み（南西を望む）



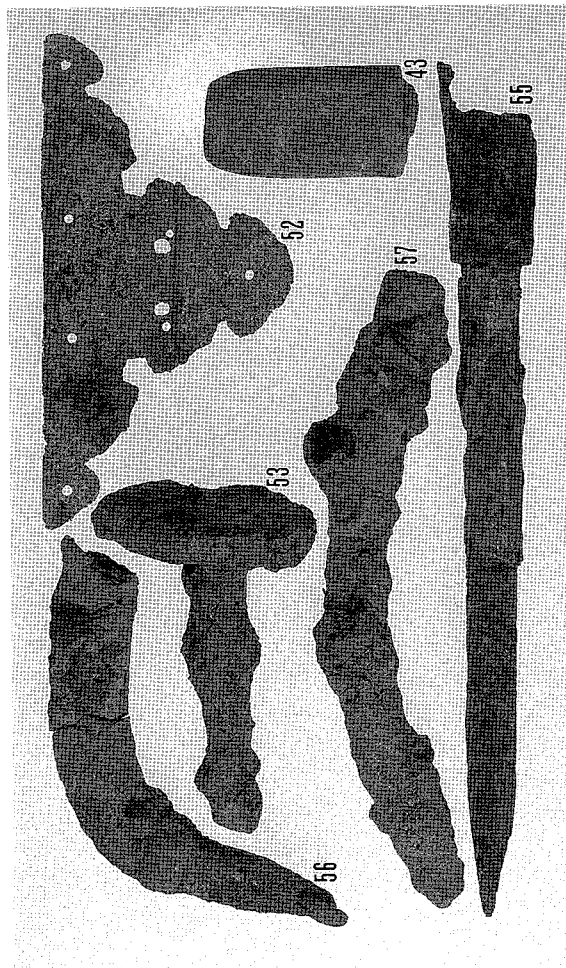
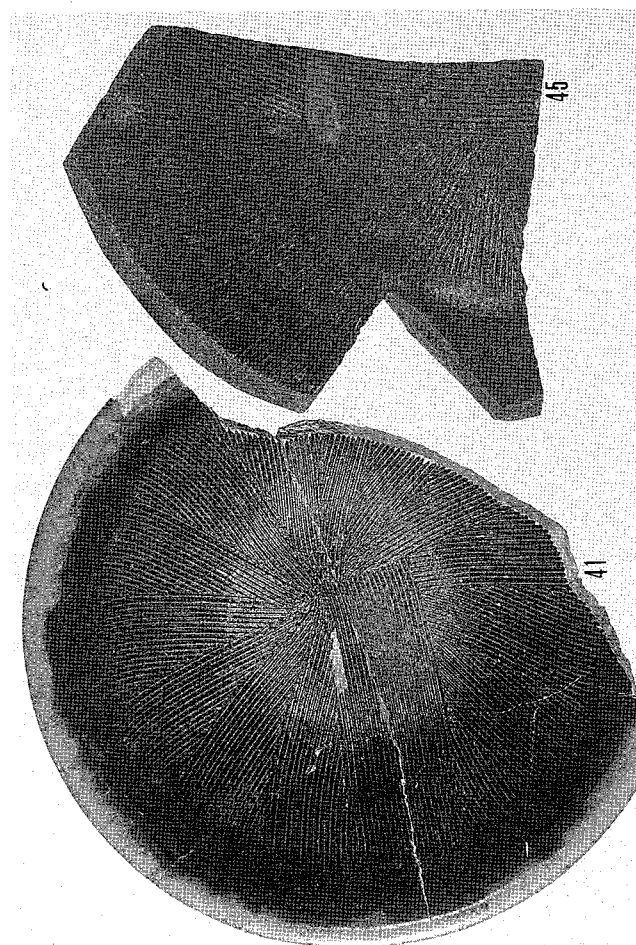
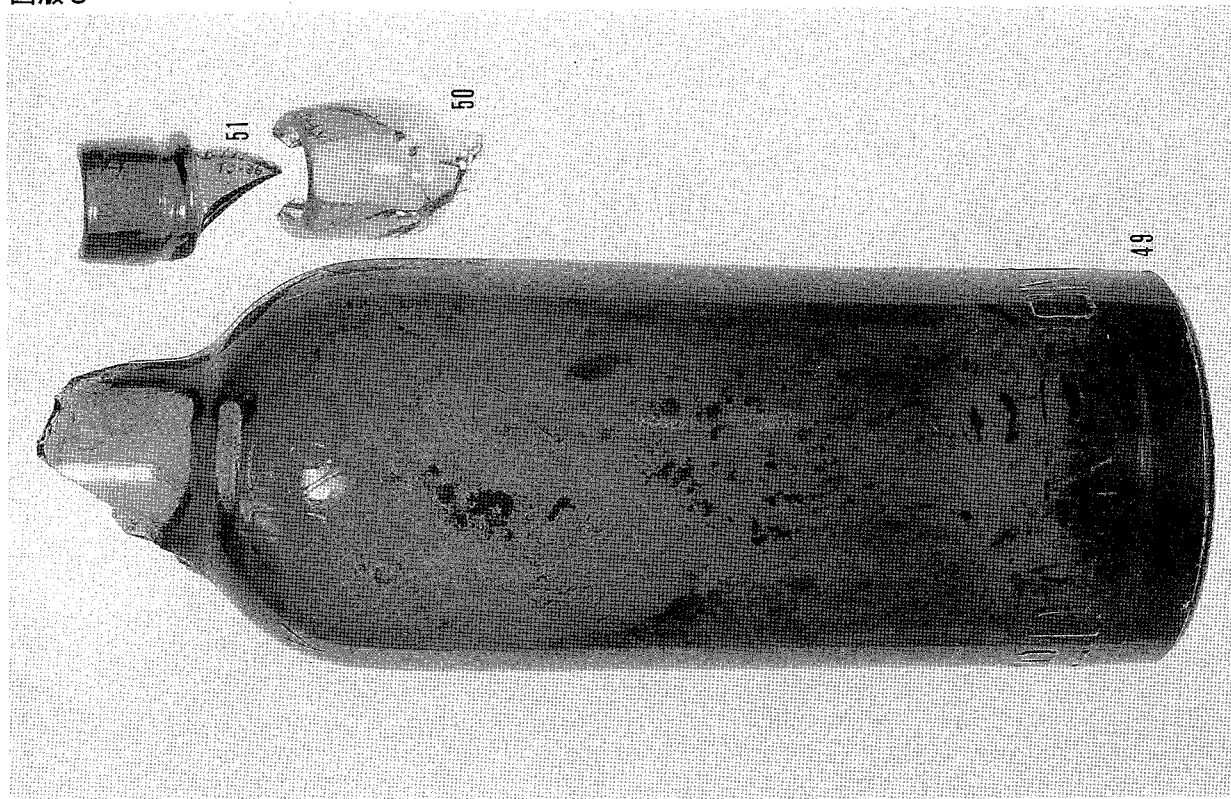
第4号横穴開口部（南西を望む）

図版5



磁器・陶器

図版6



陶器・漆器・ガラス瓶・銅製品・鉄製品・石製品